阪神・淡路大震災
尼崎119の活動記録

震災文庫
5
204

尼崎市消防局・尼崎市消防団

00096072290

西昆陽１丁目

山陽新幹線高架落下/尼崎市下食満

常松１丁目

常松１丁目の一般住宅

戸ノ内町

常松１丁目

初島大神宮

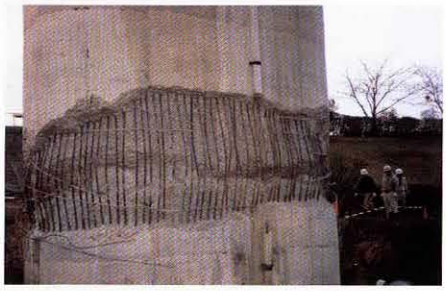
市立尼崎高等学校

南武庫之荘１丁目

築地丸島町

南初島町

南初島町



山陽新幹線の橋脚破損／常松１丁目

大高須町／東高州橋　可動橋

東高州橋　可動橋北側

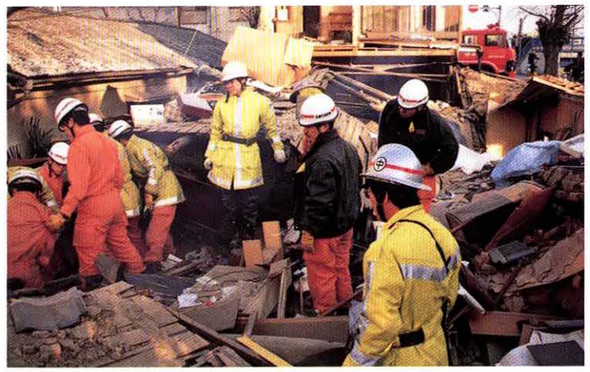
新幹線側道／常松２丁目

武庫川堤防／甲武橋北側

液状化により電柱が沈下／築地

蓬　川　緑　地

昭和通１丁目

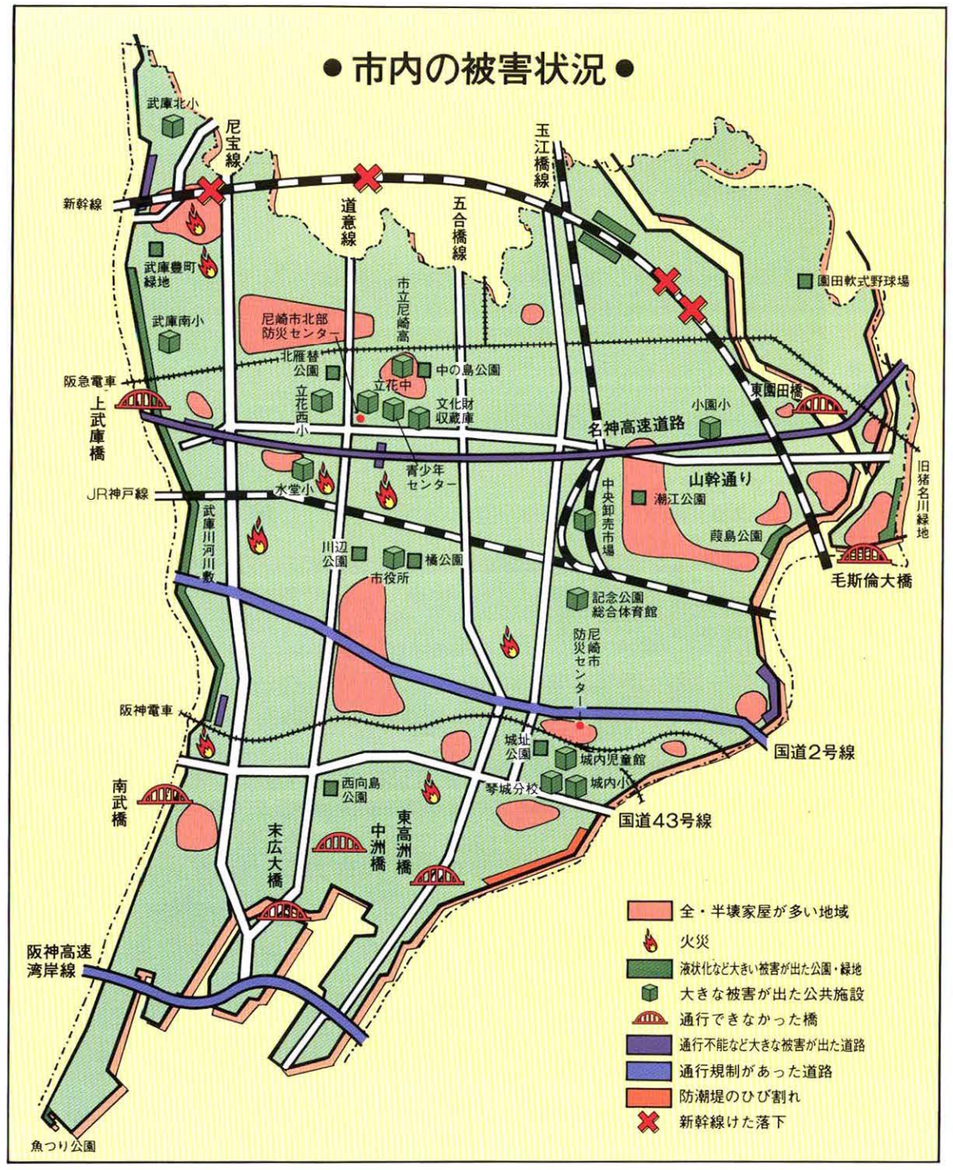


東難波町３丁目

東難波町３丁目

常松２丁目

立花町３丁目



火災現場／立花町３丁目

立花町３丁目
の火災現場

稲葉元町１丁目の
火災現場

戸ノ内町

南武庫之荘１丁目

上ノ島町

地震の概要

- 発生年月日　平成７年１月17日（火）５時46分
- 震央地名　淡路島（北緯34°36′　東経135°03′）
- 震源の深さ　20km
- 規　　模　マグニチュード 7.2
- 津　　波　なし
- 各地の震度　震度６　神戸　洲本
  震度５　京都　彦根　豊岡
  震度４　岐阜　四日市　上野　福井　敦賀　津　和歌山　姫路　舞鶴　大阪　高松　岡山　徳島　津山　多度津　鳥取　福山　高知　境　呉　奈良
  震度３　山口　萩　尾鷲　伊良湖　富山　飯田　諏訪　金沢　米子　広島　潮岬　松江　室戸岬　松山　西郷　輪島　名古屋　大分
  震度２　佐賀　三島　浜松　高山　伏木　河口湖　宇和島　宿毛　松本　下関　静岡　甲府　長野　横浜　熊本　日田　都城　軽井沢　高岡　御前崎　宮崎　人吉
  震度１　福岡　熊谷　東京　水戸　網代　浜田　新潟　足摺　宇都宮　前橋　小名浜　延岡　平戸　鹿児島　館山　千葉　秩父　阿蘇山

（注１）尼崎市については、関西地震観測研究協議会設置の地震計で設定の震度を振り切っており、震度は６であったことがうかがえる。

（注２）気象庁が地域機動観測班を派遣し、現地調査した結果、２月７日、次の地域が震度７とみられている。
【神戸市】須磨区 鷹取 / 長田区 大橋 / 兵庫区 大開 / 中央区 三宮 / 灘区 六甲道 / 東灘区 住吉
【芦屋市】芦屋駅周辺
【西宮市】夙川
【淡路島】北淡町 一宮 / 津名町の一部
【宝塚市】宝塚市の一部

● 余震の発生状況（神戸海洋気象台調べ）

■ 余震の発生状況

無感を含めた余震は、10月２日、12時00分迄に2,270回発生した。

■ 有感地震発生状況

2,270回のうち有感地震が295回、最大規模は、１月25日午後11時16分ごろ発生したもので、規模は次のとおりであった。

（ア）規　模　マグニチュード 4.9
（イ）震　度　４（大阪 / 西宮）

東 海 岸 町

南初島町（中島川）

南 初 島 町

南 初 島 町

東 海 岸 町

東 園 田 橋

寄贈

震災文庫 5-204

神戸大学附属図書館
平成
8年10.25
No. 9607229

目次

ドキュメント 12
ごあいさつ 14
尼崎市の被害状況 16
尼崎消防の活動状況 23
災害現場から 消防職員・消防団員の手記 36
地震防災シンポジウム
安全都市あまがさきをめざして 44
第一部 基調講演 45
第二部 パネルディスカッション 48
震災復興 市民のつどい 52
第一部 基調講演 53
第二部 特別講演 57
復興の息吹 58
あとがき 63

●ドキュメント

1月

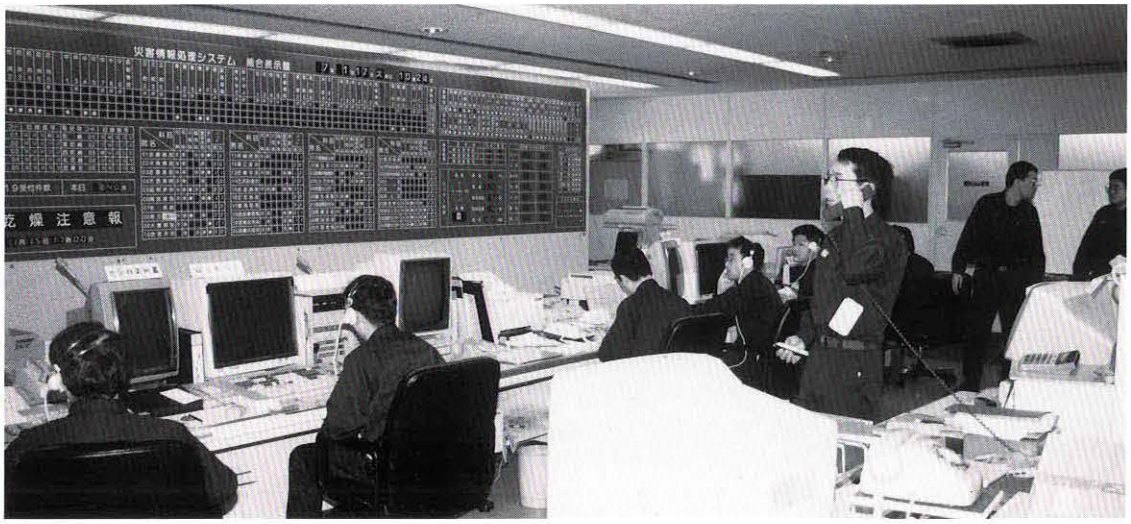
17
- 05:46 兵庫県南部を中心に強い地震が発生
  当務員117名で火災、救急、救助活動を開始
- 06:10 尼崎市防災指令第１号を発令
  尼崎市災害対策本部を設置（市役所２階）
  非常召集の発令（第１号配備体制）
- 06:20 消防部本部を設置（防災センター３階）
  消防部方面警防隊本部を設置（４消防署）
- 06:23 立花町３丁目で大規模火災発生（共同住宅等５棟約1,730㎡が全焼し、死者11人）
- 07:00 災害対策本部員会議開催
- 09:00 消防職員の79.45％の232名が参集、稼働人員321名85.33％
- 13:00 消防職員の90.75％の265名が参集、稼働人員382名93.40％
- 17:00 立花町３丁目の火災現場に自衛隊の派遣を要請
- 21:00 自衛隊第36普通科連隊指揮者２名立花現地調査入り
- 18:45 ８件の火災は全て鎮火（事後聞知１件を含む）
- 22:00 特別救助隊（１台６人）が芦屋市へ18日７時30分まで応援出動
- 23:00 避難者数7,855人。朝食１万食を用意
- 23:00 防災センターへ140人、北部防災センターへ250人、西消防署へ26人の避難者を収容
- 24:00 消防職員の96.58％の282名が参集、稼働人員399名97.56％
  - ○ 防災センター備蓄の毛布2,130枚全て、乾パン17,472缶、ポリ缶203缶を救援物資として出す（最終払出し６月16日毛布100枚、計5,287枚を出す）
  - ○ 北部防災センター備蓄の毛布1,513枚、乾パン3,056缶を救援物資として出す（最終払出し４月21日毛布100枚、計2,013枚を出す）

18
- 07:00 消防、警察と自衛隊（第３師団、36普通科連隊61人）が立花町３丁目の火災現場で捜索活動開始
- 09:00 芦屋市へ消防隊２隊（１隊は燃料搬送隊）、消防団３隊が応援出動
- 09:00 西宮市へ東消防署消防隊が応援出動
- 14:00 全所帯（23,900戸）で送電復旧
- 18:00 尼崎市内での行方不明者はゼロを確認
- 20:00 北部防災センターの避難者256人
  - ○ 大阪府から毛布2,500枚、Ｓ百貨店から毛布2,500枚、池田市から毛布500枚を救援物資として受け入れる

19
- 09:00 芦屋市へ特別救助隊、燃料搬送隊、救急隊各１隊、消防団５隊が応援出動
- 09:00 西宮市へ西消防署消防隊が応援出動
  - ○ 尼崎市杭瀬寺島～明石市の国道２号線を一般車両通行止めを県公安委員会が発表
  - ○ 市立67小学校のうち64校で授業再開
  - ○ 和歌山県から毛布676枚、京都府から毛布400枚、長岡京市から毛布260枚を救援物資として受け入れる
  - ○ 小田南公園で仮設住宅の建設始まる

20
- 08:00 特別救助隊（１台４人）が神戸市へ21日２時00分まで応援出動
- 09:00 芦屋市へ消防団７台45人、園田分署消防隊１隊、本部予備救急隊１隊応援出動
  - ○ 日本防火協会から毛布1,000枚を救援物資として受け入れる
  - ○ 防火水槽、学校プール、事業所等の自然水利調査開始
  - ○ 災害対策本部からのお知らせビラ第１号を避難所、支所、本庁に掲示。以後、4月29日までに計28回発行

21
- 09:00 神戸市へ特別救助隊（１台５人）、芦屋市へ予備救急隊１台、東消防署消防隊１隊、消防団６台32人が応援出動



消防局通信指令室の状況

22　09:00　神戸市、芦屋市へ特別救助隊、救急隊各１隊、応援出動
　　20:00　91か所の避難所に9,494人が避難しピーク
　　○　西消防署への避難者39人
23　08:00　兵庫県庁へ救援物資配送のため消防団11台61人が応援出動
　　09:00　神戸市へ特別救助隊１隊応援出動
　　○　全市を対象に本格的被害状況調査を開始
24　09:00　神戸市へ特別救助隊１隊応援出動
25　08:00　神戸市、芦屋市へ特別救助隊、救急隊各１隊、応援出動（25日～27日まで）
26　○　仮設住宅など入居者１次募集始まる
28　○　水路の擁壁の傾き・クラック・部分的倒壊の応急修理完了
28　08:00　芦屋市へ救急隊１隊、消防団６台38人、応援出動
29　08:00　芦屋市へ救急隊１隊、応援出動（29日～31日、31日は消防隊１隊増隊）
31　○　市内全域に水道が平常時配水圧に回復、以後専門家による漏水調査を実施

2月

　　１日から10日まで芦屋市へ救急隊１隊、応援出動
3　○　尼崎市災害対策復興本部（本部長＝宮田市長）を設置
9　○　市内での死亡者27人全員の身元及び死因が判明

3月

5　10:00　兵庫県南部地震尼崎市犠牲者合同慰霊祭を尼崎リサーチ・インキュベーションセンターで実施
9　○　尼崎市震災復興基本計画策定委員会を設置
　　○　気象庁が北部防災センターに震度計を設置
27　○　仮設住宅建設総数2,186戸

4月

27　○　尼崎市震災復興基本計画を策定
28　○　第２次避難所への移動始まる

5月

10　○　第１次避難所をすべて閉鎖

6月

5　○　地震防災シンポジュウム「安全都市あまがさきをめざして」を中小企業センターにおいて開催
8　○　防災会議開催
30　○　尼崎市震災復興計画を策定
　　○　消防災害応急対策計画策定委員会を開催

7月

19　○　尼崎市防災総合訓練を武庫川河川敷において実施

8月

6　05:30　消防団非常召集訓練を実施
7　○「震災復興市民のつどい」をアルカイックホール・オクトにおいて実施
9　10:00　高規格救急自動車（澤水号）寄贈される
29　○　尼崎市地震災害対策総合訓練を市内６か所の会場で実施
31　○　防災展（防災週間中8/31～9/5）を防災センターで実施（入館者419名）

9月

1　○　地震を踏まえた兵庫県防災総合訓練（加古川市）に参加
14　10:00　消防災害応急対策計画策定委員正副部会長会議開催
　　○　仮設住宅建設総数2,218戸

10月

2　○　阪神広域企画防災担当者会議開催（中小企業センター）
25　○　尼崎地区石油コンビナート等総合防災訓練実施

地震直後の防災センター５Ｆ事務所

消防部本部

ごあいさつ

尼崎市長
宮田良雄

本年1月17日午前5時46分、兵庫県南東部を突如として襲った大地震は、長い年月にわたって築き上げてきました阪神・淡路地区における都市の財産や基盤を無残にも一瞬にして崩壊させただけでなく、5千5百余名もの尊い命が犠牲となるなど未曽有の大被害をもたらしました。

本市におきましても、48人もの尊い市民の命が失われ、多数の方々が負傷されたほか、多くの家屋が全・半壊となり、道路や橋梁等の各種公共施設の損壊、ライフラインの寸断など大規模な被害に見舞われました。

お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りいたしますとともに、被災された皆様に、心からお見舞い申し上げます。

今後は、このような悲惨な経験や教訓を生かすために、市民の英知とエネルギーを結集し、新たなまちづくりを進めていかなければなりません。そのため、本市では現在、市民の皆様が安心して住み続けられるまちづくりを進めるため、震災復興基本計画に基づき“人にやさしい、みずとみどりのさわやかなまちへ”を目標に、震災に強く、また、うるおいのあるまちづくりに全力で取り組んでいるところでございます。

この度の震災を経験した防災関係者としては、大震災の教訓を今後の防災対策に生かしていくとともに、後世に残していかなければなりません。

そうした意味からも、この度、「阪神・淡路大震災 尼崎119の活動記録」が尼崎消防の貴重な活動記録として発刊することになりました。

発刊にあたり、ご協力いただきました関係各位に深く感謝申し上げます。

この活動記録を一人でも多くの方々にご覧いただき、今後の防災活動に活用していただければ幸いです。

尼崎市消防局長

堂本嘉巳

濃尾地震から100年、そして南海地震から今年で丁度50年目、活断層の動く都市直下型大地震が当市を襲った。これらいずれの地震でも尼崎市は大きな被害を受けたのである。過去幾多の水害に泣いた尼崎。

「地盤の低い都市は地震も怖い。」が口癖だった先人たち。その教えに従い市内2カ所に防災センターの建設。地震に強い100t防火水槽の設置や食料、毛布、医薬品等の備蓄に取り組んで10年目。果して十二分に機能しただろうか、不十分さはなかったか、M7.2　震度7の地震を実体験した者として、反省し、多くのものを学び、将来の尼崎消防の防災指針に思いを巡らさねばならない。

地域防災計画地震災害対策編の改訂も今回の地震を教訓としてその作業が着々と進んでいる。

災害に対する行政、市民、事業者それぞれの役割と行動のありかたなどがこの記念誌の発行と共に明らかになり、生きた能動的、共助的な、尼崎市民の防災に対する姿勢が、そして組織が確立されることになるであろう。いずれにしてもそれぞれの地域でよく消火に、救助に、救護救援に必死になって活動いただいた方々に深く感謝すると共に消防人が決意新たに防災全般にわたり全力を投入しなければならない。そこに私たちの使命がある。さらに、全国から温かいご支援と激励を戴いた多くの人々、団体、消防関係者に深く感謝申し上げるところである。

尼崎市消防団長

溝口信次

尼崎市消防局と消防団の協賛で他市より先んじて、このような歴史に残る震災誌を発刊することに際し一言ご挨拶を申し上げます。

あの阪神・淡路大震災から早や10ケ月が経過しようとしておりますが、今なおあの当時の様子が目に浮かびます。

私の永年の人生においても多くの災害を体験したが、このような大きな震災は初めての体験でした。

幸い尼崎市域における地震のための火災は少なく、立花町の火災も、消防局の早い初動態勢と消防団の水利確保の連携により、大きな延焼を防ぎ、火災で逃げ後れた方々の検索活動も、消防局長のご配慮により自衛隊が早く出動していただき、震災翌日の夕方には、検索確認が完了しておりました。

しかし、尼崎市域においてもかなりの地震の被害が出ており、消防団としても火災の警戒・警備、消防水利の確保調査、そして救援物資の搬送等の活動があるにもかかわらず、地震被害の最も大きい神戸・芦屋への応援に出動し、私も自ら約2ケ月間陣頭指揮に当たりました。又一部団員は5月末まで被災住民の夜食の配給を深夜に及ぶまで実施しました。県下の消防団においても尼崎市同様救援物資集積場所における振り分け作業等に従事して頂きました。

私はこの一致協力した消防団員の一人一人に感謝の誠を捧げ、大いに誇りたいと思っております。

最後になりましたが、この震災で亡くなった5,500余名（うち尼崎市48名）の方々のご冥福を祈りつつ、今後もより一層消防団活動に精進して参りたいと思っております。

尼崎市の被害状況

●被害の概要

今回の地震により尼崎市内では死者48名、負傷者7,112名を出した。地震直後8件の火災が発生、16棟がり災し、死者11名、負傷者2名、焼損面積2,572㎡に達した。地震による生き埋めや逃げ後れの38名を救助、救急出動件数は138件を数えた。

水道はほぼ市内全域で断水した。道路は市内の至る所で隆起や陥没をしたり建築物の倒壊などで通行障害ができ、さらには、毛斯倫（もすりん）大橋、東園田橋、上武庫橋、中州橋など多くの個所で通行止めになり災害活動に大きな支障をきたした。

また、山陽新幹線の橋桁も食満（けま）と、常松（つねまつ）の地区で落下した。防潮堤にも被害が発生し、中島川では、約1㎞にわたりひび割れによる漏水、左門殿川では防潮堤陥没をおこした。

河川では、武庫川、猪名（いな）川、藻（も）川、旧猪名川、昆陽（こや）川、蓬（よも）川の堤防の沈下や、傾いたりした。尼崎閘（こう）門はワイヤーが切断され、本体も損傷を受け一時は作動しなかった。

臨海部や河川敷などでは、液状化現象が起き、家屋の被害は全市域に及び、無数の傾斜、倒壊するなど大きな被害を出し、全半壊合わせ53,723世帯を数えた。

避難者は一時市内91か所の避難所に9,494名を収容した。

●尼崎市の人的被害（尼崎市災害対策本部調べ）

今回の地震による死者は尼崎市内で48人、そのうちの11人は立花町３丁目の家屋倒壊現場での火災により焼死したものである。

No.	区　分	人　数	
1	死　亡		４８人
2	負　傷	重傷	９７６人
		軽傷	６，１３６人
		計	７，１１２人

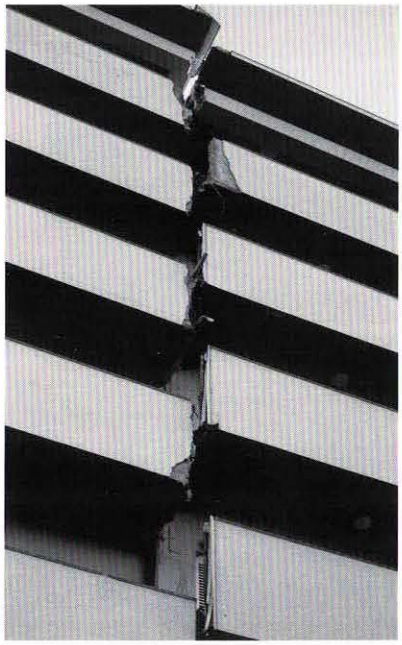
（震災当日の死者は27人）

●家屋の被害状況（10月３日現在）

家屋の被害は全市にわたって受けた。全壊が10,166世帯、半壊が43,557世帯、一部損壊については多数の被害を受けた。

No.	区分	本庁	小田	大庄	立花	武庫	園田	合計
1	全壊	1,729	801	1,187	1,892	2,487	2,070	10,166
2	半壊	5,865	5,389	4,226	12,814	7,189	8,074	43,557
合計		7,594	6,190	5,413	14,706	9,676	10,144	53,723

損壊は木造家屋が中心であるが、鉄筋マンション等も倒壊した。築地、戸ノ内、東園田、ＪＲ尼崎駅北、昭和通、西大物地区等で大きな被害がでた。また、公共施設では、城内地区出張所、同児童館は倒壊の危険があり、市立尼崎高校、立花中学校、水堂・立花等の５小学校や文化財収蔵庫等が被害を受けた。更に、41件の指定文化財のうち15件が被害を受け、都市美形成建築物28件指定のうち、３件が全壊、22件が半壊、３件が一部損壊の被害を受けた。



南武庫之荘１丁目マンション

●火災による被害状況

地震に伴い、６時00分から18時39分までの間に８件の火災が発生し、16棟が焼損し焼損面積は2,572㎡に達し、り災世帯85世帯、り災人員は131名、このうち死者11名、負傷者２名であった。

８件のうち、地震発生直後に発生した火災は５件で、そのうち２件が延焼拡大した。

No.	覚知時刻	発生場所（り災世帯人員）	火災概要	死傷者
1	6:00	武庫の里１-17-10	部分焼、医院１棟 歯科医院の技工室の鋳造機が転倒し鋳型が漏れ出火、技工室６㎡焼損	－

防災センター屋上より
立花町３丁目火災現場をみる

2	6:05	武庫の里２-５-４ （り災 １世帯 ５名）	部分焼、住宅１棟 湯沸器が倒壊し漏洩ガスに引火、住宅の内壁等３㎡焼損	－
3	6:05 鎮火 17:00	稲葉元町１-７-16 （り災 41世帯 74名）	家具が石油ストーブ上に転倒、当ストーブも転倒し出火 全焼 共同住宅 １棟 535㎡ 住宅 １棟 266㎡ 半焼 店舗 １棟 25㎡ ぼや 店・共 １棟 0㎡ 焼損床面積 計 826㎡ ※石油ストーブ対震消火装置なし	中等症 １人
4	6:23 鎮火 17:57	立花町3-2-24～26 （り災 40世帯 76名）	倒壊した住宅か、共同住宅からの出火 全焼 住宅 ３棟 798㎡ 共同住宅 ２棟 932㎡ ぼや 住宅 １棟 0㎡ 焼損床面積 計 1,730㎡	死者 11人
5	6:56	西本町６-37 （り災 １世帯 １名）	部分焼、事務所併用共同住宅１棟 水槽用ヒーターの落下によりヒーターが過熱し出火、事務所併用共同住宅の10㎡焼損	
6	10:45	立花町４-16-20 （り災 １世帯 ３名）	ぼや 住宅 １棟 布団の上に倒れていた電気ストーブが電気復旧により加熱、住宅の床板等若干焼損	
7	18:39	東難波町3-25-30 （り災 １世帯 ３名）	部分焼 住宅 １棟 配管の破損により漏洩したガスにローソク火が引火し、住宅の内壁２㎡焼損	１人 軽症
8	1/22 10:00 （事後開知） 発生 1/17 7:35	武庫川町４-12 （り災 １世帯 １名）	部分焼、共同住宅１棟 寝具の上に落下していた水槽用ヒーターが電気復旧後過熱し出火、共同住宅の内壁３㎡等焼損	

立花町３丁目火災

［合計］

焼損棟数	計16棟	焼損床面積	り災世帯及び人員
全　焼	７棟	2,572㎡	86世帯　163人
半　焼	１棟		
部分焼	５棟	死者及び負傷者	
ぼ　や	３棟	死者　11人	負傷者　２人

●消防水利の被害状況

■ 消火栓

消火栓自体の被害は無かったが、地震直後において市内全域で断水状態となり使用できなかった。

■ 防火水槽

●公設防火水槽のうち漏水と推定される減水があったものが3基、また、蓋及び蓋枠のコンクリートに若干の破損があったものが3基の計6基に被害がみられた。

●指定水利の防火水槽については、2基が漏水と推定される、減水がみられた。

■ その他

指定水利のプールが1箇所破損し使用不能となった。

●ライフラインの状況

■ 水　道

地震直後において市内全域で断水状態となっていたが、市内業者及び他都市などの支援を受け断水地域の解消に努めてきた結果、発災14日後の1月31日に市内全域の配水管に水道水が行きわたるまでに復旧した。また、修繕申し込み件数がほぼ平年並になったことから、今回の震災に伴う水道管被害の復旧は3月25日をもって完了した。

●市内32箇所に給水拠点を設け、給水活動を実施したが、復旧に伴い2月16日に撤去。

終日給水場所　30箇所　　時間給水場所　2箇所　　計　32箇所

●管の破裂状況（3月1日現在）

・道路等の管の破裂	受付件数	1,759件
	処理件数	1,759件
	未処理件数	0件
・宅地内の水道管の破裂	受付件数	11,695件
	処理件数	11,695件
	未処理件数	0件

園田支所前庭

■ 電　気

市内全地域239,000戸にわたり停電状態となったが、平成7年1月18日14：00復旧解消している。

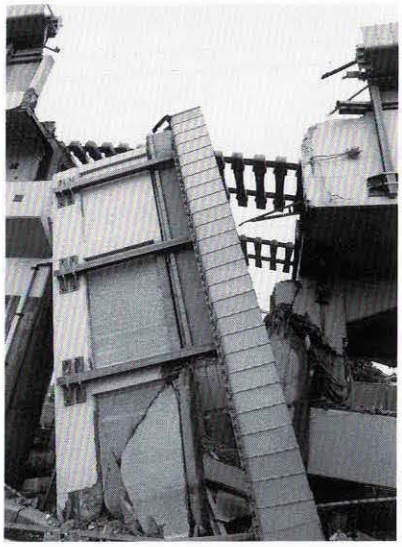
■ ガ　ス

市内533箇所でガス漏れが発生し、一部供給停止地域（液状化の激しい築地地区1,000戸）が出たが、2月13日現在、この地区のメイン道路の本管、支管について復旧工事が完了している。

■ 電　話

発災後、かかりにくい状態が数日続いたが、回線の断線等機能的には障害はなかった。

液状化を示す初島大神宮



新　幹　線

●道路の状況

■ 一般道路

陥没等被害件数42件（道路23箇所、橋梁19箇所）うち通行不能箇所３箇所

■ 高速道路

●名神高速道路	尼崎～西宮間　橋げた落下		（７月21日全線開通）
●中国自動車道路	一部橋げた修理中		（全線通行可）
●阪神高速道路	３号神戸線　橋げた落下	橋脚崩壊	（一部通行可）
	５号湾岸線　〃	〃	（　〃　）
	空港線・環状線　仮復旧		（全線通行可）

●公園の状況

地割れ、公園樹の倒壊等13箇所

●水路の状況

擁壁の傾き・クラック・部分的倒壊等35箇所延べ1,520ｍに被害。

※　初島地区の防潮堤に１kmにわたり亀裂が起こり漏水したが、漏水防止工事（矢板打設工）を１月21日から着手、１月29日に完了した。また、土砂埋め戻し工事を２月23日に完了した。現在、県は、復旧改良工事の一部で漏水防止を含めた仮堤防として鋼板による二重締め切り工事を５月初旬から着工しており、本復旧については、当該仮堤防工事が完了次第着工する予定である。

●交通機関の状況

■ 新　幹　線　　山陽新幹線　４月８日新大阪～姫路間開通（全線開通）

■ Ｊ　　Ｒ　　東海道山陽本線　１月18日大阪～尼崎、１月25日芦屋、４月１日全線開通

福知山線　１月19日尼崎～三田開通

■ 阪急電気鉄道　　神戸本線　１月18日梅田～西宮北口開通、６月12日全線開通

伊 丹 線　１月21日塚口～新伊丹開通

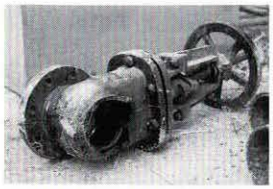
■ 阪神電気鉄道　　阪神本線　１月18日梅田～甲子園、６月26日全線開通

西大阪線　１月18日17:30頃尼崎～西九条開通

■ 市営バス

区　　分	１月17日現在	５月31日現在
休止路線数	３　路　線	０　路　線
一部休止路線数	－	０　路　線
迂回路線数	－	１　路　線（9/9から解除）
影響人数	12,000人	120人

●危険物施設の被害状況



■ 事業所及び施設数

危険物保有事業所は、580事業所で2,324施設である。このうち被害は、49事業所の113施設、164件発生している。

■ 火災及び漏洩

地震による火災は発生していないが、次の施設で危険物が漏洩した。

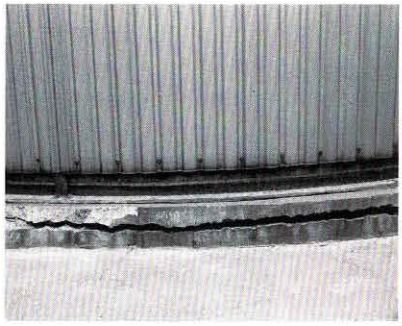
・製　造　所　1施設　　・屋外タンク貯蔵所　2施設
・屋内貯蔵所　30施設　　・地下タンク貯蔵所　1施設

これらの漏洩は、地震の揺れと液状化によるラックの崩壊、容器の荷崩れ、落下及びタンクの不等沈下に起因するものである。漏洩危険物は、すべて回収を行った。

■ 施設区分ごとの被害状況

1	屋内貯蔵所（45施設）	（47件）
	・ラックの崩壊及び荷崩れによる容器の落下（漏洩）	32件
	・ラックの崩壊及び荷崩れによる容器の落下（漏洩なし）	7件
	・外壁、床面の亀裂及びスレート屋根の破損	7件
	・ベンチレータの破損	1件
2	屋外タンク貯蔵所（30施設）	（58件）
	・特定タンクヤード内地盤面亀裂（幅10～20㎝深さ1m長さ50m）	1件
	・タンク払出しバルブ（第2バルブ）の破断による漏洩	1件
	・受け入れ配管の折損及び破断	2件
	・防油堤の亀裂及びひび割れ	16件
	・基礎の破損及びひび割れ	9件
	・非特定タンクの不等沈下1/50以上（基礎修正要）	4件
	・その他防油堤内液状化、タンク若干の不等沈下等	25件
3	地下タンク貯蔵所（6施設）	（9件）
	・地下貯蔵タンクからの漏洩	1件
	・埋設配管の亀裂	4件
	・上部スラブの亀裂	1件
	・液状化によるタンク基礎及びスラブ浮上	3件
4	屋外貯蔵所（5施設）	（6件）
	・床面等の亀裂	6件
5	給油取扱所（11施設）	（23件）
	・防火塀の倒壊の恐れ及び亀裂、破損	10件
	・キャノピーの傾き及び支柱の亀裂	2件
	・販売室の傾き	1件
	・建屋及び給油空地床面等の亀裂	10件
6	製造所（2施設）	（2件）
	・床面の沈下、亀裂等	2件
7	一般取扱所（14施設）	（19件）
	・建屋周辺の液状化による隆起、陥没	5件

南初島町



西向島町

消防職員宅の被災状況

火災、救急、救助と地震後活動をした消防職団員自身も被災者であり自宅が全壊や半壊しているにも係わらず任務を果たした。

	全壊	半壊	一部損壊	被害なし	申請中	合計
職員宅被害合計	18	92	159	148	1	418
総務課		6	4	9		19
職員担当			3			3
予防課	1	3	1	7		12
消防防災課	1	5	12	11	1	30
情報指令課		9	13	5		27
中消防署	4	16	22	33		75
東消防署	3	14	34	13		64
西消防署	5	15	29	39		88
北消防署	4	24	41	31		100
%	4.3	22.0	38.1	35.4	0.2	100

	全壊	半壊	一部損壊
消防団被害合計	54	243	325
中央地区	6	21	39
小田地区	0	15	34
大庄地区	2	7	60
立花地区	5	65	40
武庫地区	35	98	51
園田地区	6	37	101

- 建屋の外壁及び床面等の亀裂　7件
- 出入口防火戸の破損　2件
- ボイラー用煙突
  （鉄製径1m×高さ32mの上部6m折損）　1件
- 折損した煙突の落下により屋根面破損　1件
- 埋設配管立ち上がり部折損　1件
- 屋外貯蔵タンク（令20号タンク）の不等沈下
  1/50以上（基礎修正要）　2件

特定防火対象物の被害状況

一昨年オープンした高層ホテル

- 高層部分と低層部分との接続部分（エキスパンションジョイント）の破損により、給水管が切損約60トンが漏水した。
- スプリンクラーヘッドが地震動により破損、約2トンの漏水があった。
- 漏水により、自動火災報知設備の感知器20個が作動不能となった。
- 当直員の仮眠室のドアーが開閉不能となり、緊急脱出口（固定避難梯子付）により脱出、宿泊者の誘導に当たった。（当日の宿泊者70名）
- 発災時、防災センターのコンピューターがダウンし、モニターの使用が不能となった。

その他の防火対象物

大型スーパー（53）、病院（29）及び老人ホーム（9）の消防用設備、防火施設の被害状況は次のとおりであった。（調査対象91）

消防用設備

被害内容	件数
・スプリンクラーヘッドの開放（変形を含む）	8
・感知器の損傷	5
・内壁破壊（水漏取り替え）	5
・誘導灯の損傷	5
・消火栓格納箱損傷	1
・消火水槽の破損	1
・消火配管の破損	3
・非常放送設備の損傷	1
・自家発電設備の損傷	1
計	30

防火施設

被害内容	件数
・防火戸の変形	10
・防煙たれ壁の損傷	5
・階段の亀裂	2
・避難通路の変形（段差）	2
・防火シャッターの変形	1
計	20

建物構造

被害内容	件数
・外壁亀裂、落下	17
・給水管破裂	3
・エレベーター・エスカレーターの機能障害	5
・床面亀裂	1
・天井落下	2
・ガス管破損	1
計	29

尼崎消防の活動状況

●消防活動の概要

今回の地震により尼崎市内では死者48名、負傷者7,112名を出した。地震後８件の火災が発生し、16棟が、り災し、り災世帯86世帯、り災人員は163名、このうち死者11名、負傷者２名、焼損面積2,572㎡に達した。

消防局指令室の32回線の119番は全てランプが点灯したが情報処理システムは正常に作動し、18日の０時までの間の受信回数は1,995件と通常の16倍に達した。

地震による生き埋めや逃げ後れの38名を救助し、救急出動件数は138件を数えた。警戒出動は278件あり、ガス漏れ通報は505件ありこのうち188件は現場出動し応急処置、警戒広報を実施した。これらの要請及び出動は、17日から20日までの４日間に集中した。水道はほぼ市内全域で断水した。道路は市内の至る所で隆起や陥没をしたり、建築物が倒壊して、更に、多くの橋梁に段差ができるなど消防活動、救助活動、救急活動に大きな支障をきたした。

尼崎市消防局では、兵庫県広域消防相互応援協定に基づき阪神ブロック代表消防本部として、芦屋市、西宮市、及び神戸市への市外応援計画を作成し、当計画に基づき１月17日から２月10日にかけて消火活動、救急救助活動及び遺体搬送等の市外応援を実施した。

消防団については阪神地区、消防団長が協議し、５市１町の消防団がそれぞれ応援協力し、芦屋市には尼崎市、宝塚市、三田市が、西宮市には伊丹市、川西市、猪名川町が応援し、被災が大きい地区の住民の検索活動を実施した。また、兵庫県消防協会長の要請により兵庫県庁で救援物資の振り分け作業活動等を実施した。

●119番の受理状況

■ 119番回線

- 119番回線数
  32回線（尼崎局6回線、東尼局6回線、西尼局6回線、
  武庫之荘局7回線、北尼局7回線）
- 指令室での119番対応
  7回線（指令台2回線、指令台副台2回線、指揮台1回線、
  受付補助台2回線）

■ 1月17日の受報回数

- 119番受付　指令台、指令台副台、指揮台、受付補助台で対応。
- 119番受付件数　1,995件
- 救急受報件数
  - ・救急車出動件数 138件（自然災害94件）
  - ・救急搬送件数　116件（自然災害75件）
  - ・救急搬送人員　122人（自然災害79人）
  - ・程度別搬送状況 死者2人　重症9人　中等症60人　軽症51人
  - ・現場処置　6件
  - ・年齢別　高齢者（60歳以上）は、83人で全体の68％である。

■ 1月17日～1月23日（1週間）の受報回数

- 119番受付件数　4,165件
- 救急受報件数
  - ・救急車出動件数 615件（自然災害94件）
  - ・救急搬送件数　543件（自然災害75件）
  - ・救急搬送人員　555人（自然災害79人）
  - ・程度別搬送状況 死者6人　重症41人　中等症243人　軽症265人
  - ・現場処置　13件
  - ・年齢別　(高齢者（60歳以上）は、297人で全体の53.5％である。

西川地区　民家

●指令管制・初動措置及び指令状況

平成7年1月17日㈫情報指令課第1係9名で勤務中（うち3名勤務、6名仮眠中）午前5時46分ドーンという音の直後に横揺れが激しく4階で仮眠中の6名は5階の指令室の管制業務に付くのが精一杯であった。この間4階仮眠室から5階指令室まで真っ直ぐに歩けず、壁沿いに歩き全員で指令管制業務の対応に努めた。

119番32回線の全てのランプが点灯し全員で119番受報に当たったが次から次へと119番通報の要請があり、一時パニック現象ともいうべき状態に陥った。

しかし、119番は1本も不通になることなく、市民の対応に全力を傾注した。

実に、地震発生の17日5時46分から24時00分の119番受報回数は、1,995件で通常の16倍の受報回数であった。

発災直後の災害種別については、火災・ガス漏れ・家屋倒壊の救助等、多く受報したが火災では通常の出動指令ではなく各消防部方面警防隊長の指揮で行

い、火災状況に応じて応援出動指令をかけた。幸いにも大きく炎上したのが2件（稲葉元町１丁目・立花町３丁目）にとどまった。

また、救急要請についても殺到したが、指令管制業務員と各署救急隊員の適切な判断で重症者と思われる傷病者を優先に救急出動し、軽症者と思われる傷病者については、近くの病院を紹介し自力対応して頂くというような非常事態であった。

●指　　揮

17日6時20分防災センター３階に消防局長を本部長とした消防部対策本部を開設した。また各消防署に消防部方面警防隊本部を設定した。

現場指揮体制は、地震発生直後から火災、救助、ガス漏れ災害等が多発したため、所轄署長の指揮のもと災害活動を実施した。

●消火活動

地震に伴い、6時00分から18時39分までの間に８件の火災が発生した。その内地震発生直後に発生したのは５件で２件が延焼拡大、消防隊は効率的な出動指令により防ぎょ活動を展開したが、地震による断水のため消火栓が使用できず、遠距離にある学校プール、防火水槽等から中継送水を行い消火活動を実施した。なお、出動車両及び人員は42台の218名であった。

■ 延焼拡大した２件の活動状況

1
- 発生場所　稲葉元町１－７－16　福寿荘
- 発生日時　１月17日　5:50
- 覚　　知　6:05（駆け付け）
- 火勢鎮圧　6:40
- 鎮　　圧　7:16
- 鎮　　火　17:00
- 出動車両及び人員　署　４台31名　団　２台20名　計　６台51名
- 使用水利　防火水槽１基、河川３か所

2
- 発生場所　立花町3-2-24～26　昌和荘、常磐松荘、常磐荘
- 発生日時　１月17日　6:15
- 覚　　知　6:23（駆け付け）
- 火勢鎮圧　9:30
- 鎮　　圧　13:45
- 鎮　　火　17:57
- 出動車両及び人員　署　17台60名　団　６台43名　計23台103名
- 使用水利　消火栓２基、学校プール１基、防火水槽４基、河川１か所

立花町３丁目火災現場

稲葉元町１丁目の火災現場

●救助活動

地震による被災世帯は、全壊10,166世帯、半壊43,557世帯に達した。この内救助出動したのは、17日に23件、18日に1件、25日に1件の合計32件であった。

救助事故は、市内各所で短時間に集中して発生したが、限られた人員・機材の中で効果的な活動を展開し38名を救出した。出動車両及び人員は98台351名であった。

武庫之荘2丁目

築地初島大神宮

南武庫之荘2丁目

番号	発生日	発生場所	地区	救助内容	救助人員	負傷者数	死亡数	用途	構造	出動車両	出動人員
1	1/17	東難波町3丁目19－14	本	建物下敷	1		1	道路	道路	2	7
2		昭和通1丁目13－1	本	建物下敷	6	5	1	長家	木造	5	22
3		東難波町3丁目27－9	本	建物下敷	3	1	2	住宅	木造	6	25
4		塚口本町7丁目7－9	立	内在物下敷	1	1		住宅	木造	1	4
5		武庫町3丁目11－5	武	建物下敷	2	2		住宅	木造	＊3	3
6		常松1丁目29－5	武	建物下敷	6	5	1	共同	木造	9	32
7		西難波町5丁目2－14	本	建物下敷	2	2		住宅	木造	5	19
8		武庫之荘1丁目32－7	武	建物閉込	3			共同	鉄筋	1	4
9		常松2丁目15－20	武	建物下敷	2	2		住宅	木造	1	3
10		武庫町3丁目3－22	武	建物下敷	2	1		住宅	木造	＊3	3
11		武庫之荘東1丁目3－22	武	内在物下敷	1	1		共同	鉄筋	1	5
12		立花町3丁目2－27	立	建物下敷	1	1		共同	木造	1	13
13		戸ノ内町6丁目3	園	ＥＶ閉込	1			共同	鉄筋	＊3	7
14		西本町5丁目56	本	建物下敷	1		1	住宅	木造	3	12
15		武庫之荘9丁目28	武	建物下敷	2		2	住宅	木造	＊7	17
16		三反田町2丁目1	立	ＥＶ閉込				共同	鉄筋	1	5
17		常松1丁目32	武	建物下敷				共同	木造	1	4
18		上ノ島町2丁目2－26	立	内在物下敷	1			共同	鉄筋	2	6
19		立花町3丁目23	立	ＥＶ閉込	1			共同	鉄筋	2	11
20		上坂部3丁目36－15	園	建物閉込				住宅	木造	2	10
21		常松1丁目36－31	武	建物下敷				共同	木造	＊9	13
22		東塚口町1丁目8	園	建物閉込				共同	鉄筋	1	4
23		水堂町2丁目6	立	建物下敷				住宅	木造	1	4
24		杭瀬北新町3丁目20－54	小	建物下敷				共同	木造	1	4
25		塚口本町1丁目28－18	立	建物閉込				住宅	木造	2	10
26	1/18	七松町2丁目19－13	立	建物下敷				物置	木造	2	9
27		南武庫之荘8丁目8－2	武	建物下敷	2	2		住宅	木造	3	12
28		常松1丁目36－31	武	建物下敷				共同	木造	3	14
29		久々知西町2丁目4－15	小	ＥＶ閉込				共同	鉄筋	2	9
30	1/21	武庫之荘2丁目28－3	武	建物下敷				共同	木造	4	18
31	1/23	塚口町1丁目12－20	立	建物下敷				住宅	木造	7	26
32	1/25	開明町2丁目43－1	本	ＥＶ閉込				共同	鉄筋	4	16

出動車両欄の＊印は、自転車等含む

［覚 知 方 法］　１１９－20件　　駆け付－４件　　その他－８件

［行　政　別］　本庁－６件　小田－２件　大庄－０件　武庫－12件　立花－９件
園田－3件

［救 助 種 別］　建物下敷－20件　　内在物下敷－３件　閉込等－９件

［救 助 人 員］　死　亡－ 8名　　負傷者－23名　　負傷なし－７名

［被救助者性別］　男性－23名　　女性－15名

［構　造　別］　木造－22件　　鉄筋－９件　　道路－１件

［用　途　別］　住宅－13件　　共同－16件　　その他－３件

●救急活動

発災直後、救急要請が殺到したが、指令管制勤務員の判断で重症者と思われる事案の救急出動を優先し、軽症と思われる救急事案については、近くの病院を紹介し自力対応させた。

更に予備車による救急隊２隊を臨時編成するとともに指揮車等４台の車両でも対応した。

地震に起因する救急事故は、市内で138件発生し、122人を搬送している。

地震発生当日に94件（68％）要請があり79人（65％）を医療機関に搬送している。

■発生件数及び搬送人員

発生日	1/17	18	19	20	21	23	24	25	27	31	2/2	5	計	
発生件数	94	16	9	2	3	4	1	1	3	2	1	1	1	138件
搬送人員	79	16	10	2	2	4	1	1	2	2	1	1	1	122人
不搬送	19	1	－	－	1	－	－	－	1	－	－	－	－	22件

■ 負傷原因・程度別搬送人員

家具等の転倒によるものが69件（60％）、そのうちタンスによるものが51件と最も多く主たる負傷原因となっている。

家屋倒壊により下敷きになったものは、21件（18％）であるが傷病程度は重症者２名、死亡者２名である。

不搬送が22件と多いのは、救急車の到着を待ちきれず家族等が搬送したもの７件、緊急性の無いものが７件、救急隊が現場で応急手当を施したものが５件含まれている。

常松1丁目

神崎川河川敷・葭島公園

		件数	搬送人員	軽症	中等症	重症	死亡
家具等の転倒	タンス	51	51	23	24	4	−
	本棚	5	5	1	3	1	−
	その他	13	16	7	9	−	−
家屋倒壊の下敷き		21	22	6	12	2	2
転倒・飛び降り等		16	16	6	9	1	−
落下物によるもの		9	11	8	2	1	−
その他		1	1	−	1	−	−
小計		116件	122人	51人	60人	9人	2人

		件数	搬送人員	軽症	中等症	重症	死亡
不搬送	搬送済み	7	−	−	−	−	−
	緊急性無し	7	−	−	−	−	−
	現場処置	5	−	−	−	−	−
	搬送辞退	1	−	−	−	−	−
	その他	2	−	−	−	−	−
	小計	22	−	−	−	−	−
合計		138件	122人	51人	60人	9人	2人

■ 年齢性別搬送人員

搬送人員122人のうち高齢者は、83人（68%）でありその内55人（45%）が女性で、災害弱者が多く負傷している。

年齢	0歳～4歳	5～9	10～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～79	80歳以上	計
男性	1	1	2	2	2	5	6	12	8	8	47人
女性	−	−	−	3	3	4	10	18	21	16	75人
計	1	1	2	5	5	9	16	30	29	24	122人

■ 発生当日の時間別出動状況

時間別内訳	発生件数	搬送人員	時間別内訳	発生件数	搬送人員
0～2時	2件	2人	12～14時	12件	11人
2～4	1	1	14～16	8	7
4～6	6	4	16～18	6	5
6～8	24	21	18～20	2	2
8～10	47	40	20～22	2	2
10～12	23	22	22～24	5	5
計				138件	122人

■ 地区別出動状況

地区別発生状況では、市内全般に発生しているが、平常時は最も少ない武庫地区が33件（24％）発生し最も多く、り災の激しさをうかがわせる。

行政別	本　庁	小　田	大　庄	武　庫	立　花	園　田	合　計
出動件数	21	22	19	34	22	20	138件

■ 医療機関別搬送人員

収容した医療機関別にみると市内が115人（94％）、市外が7人（6％）で市内の告示医療機関への搬送は、98人（80％）である。

発災当日は、各医療機関とも外来患者が殺到し、患者が廊下にも溢れ野戦病院を思わせる。

救急隊は、医療機関に直接交渉し搬入している。

医療機関	救急告示						その他の医療機関						計					
	国立	公立	公的	私的 病院	私的 診療所	計	国立	公立	公的	私的 病院	私的 診療所	計	国立	公立	公的	私的 病院	私的 診療所	計
市内	－	5	－	89	4	98	11	－	－	4	2	17	11	5	－	93	6	115
市外	－	－	－	2	－	2		－	－	5	－	5	－	－	－	7	－	7
合計	－	5	－	91	4	100	11	－	－	9	2	22	11	5	－	100	6	122

昭和通1丁目
倒壊家屋よりの救出

防災センター

■ 避難所・仮設住宅からの救急要請の状況（11月20日現在）

- 避難所および仮設住宅からの救急要請件数は243件（うち不搬送件数12件）あり、そのうち232人を医療機関に搬送している。5月31日を最後に避難所からの救急搬送はなく、男性が111人（47.8%）女性が121人（52.2%）とわずかに女性が多い。
- 60歳以上の高齢者は男女とも65人で130人（全体の56%）である。最高齢者は94歳の女性で他に91歳の女性が2人、最年少者は1歳の幼児である。
- 傷病内容は、感冒、肺炎、呼吸器疾患等合わせて52件と最も多く、次いで転倒などによる打撲、骨折、挫傷等の外傷合わせて32件となっている。消化器系の疾患が25件、循環器系が14件と続き、急性アルコール中毒、アルコール依存等の不安定神経症からと思われるのが10件となっている。

年　齢	0歳～4歳	5～9	10～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～79	80歳以上	計
男　性	2	2	6	2	5	10	19	36	19	10	111
女　性		1	7	5	9	13	21	15	28	22	121
計	2	3	13	7	14	23	40	51	47	32	232

■ 救急ヘリコプター中継状況

当市の臨時ヘリポートである武庫川河川敷（大島1丁目～2丁目）を中継点として神戸市の要請により中継活動を実施、各医療機関に搬送している。

1．2月17日　15：05　神戸市六甲アイランド病院から関西労災病院
　　45歳　男性　クモ膜下出血
2．2月20日　13：24　神戸市須磨区から兵庫医科大学病院
　　28歳　女性　腎不全
3．2月23日　12：57　神戸市北区、済生会兵庫県病院から県立尼崎病院
　　0歳　乳幼児　肺動脈閉鎖症

●その他の災害出動

下坂部・常願寺

地震発生直後から火災、救助及び救急出動の他、ガス漏れ警戒出動等で278件出動、特に17日から20日までの4日間に集中した。

■ ガス漏れによる警戒出動

地震によりガス配管が破損し、市内の各地でガス漏れが発生、消防局への通報が505件あり、この内188件現場出動し、粘土等による応急処置、警戒広報及び大阪ガスへの派遣要請等を行った。不足が生じた応急処置に必要な粘土、テープは、20日の午前中には市内の業者から取り寄せ、各署所へ補給した。

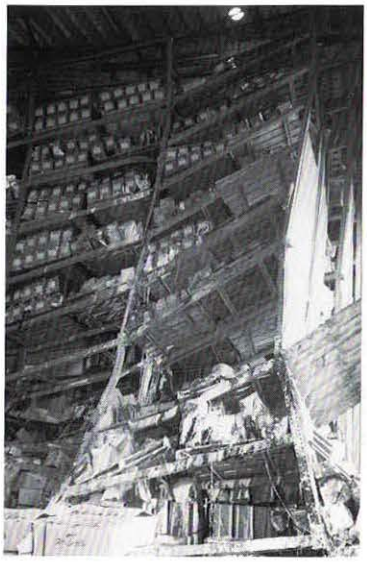
なお、消防局で応急処置した件数は、出動件数の割には少なく、地中に埋設されたガス管からのガス漏れが多かった。

■ 家屋倒壊危険、自動火災報知設備の作動等による警戒出動

ガス漏れ警戒出動の他、地震による家屋倒壊危険及び自動火災報知設備の

作動等による警戒出動は90件あった。

出動種別	出動件数	出動台数	出動人員
ガス漏れ	188件	175台	775名
家屋倒壊危険	24件	27台	112名
自動火災報知設備作動	22件	21台	93名
油漏れ	4件	6台	24名
誤報・その他	40件	52台	36名
合計	278件	281台	1,040名



南初島町

●広報車等による広報の状況

地震発生に伴い、ガス漏れ事故が多発、ガス漏れに関する火気の取扱い注意の広報、又、地域の断水で火の元の注意を市民全般に周知させるため消防局保有の広報車等を使用し、発災後1月30日までは災害対策本部広報班統一の広報区域、1月31日からは、消防独自の広報を各署所ごとに実施した。

- 防災行政無線、個別受信機（公共施設等198カ所に設置）により災害情報、生活情報を消防局通信指令室より伝達した。

■ **1月18日から1月30日までの13日間、広報活動実施状況は、出動車両188台、出動人員336名、活動時間215時間であった。**

	出動車両台数	出動人員	時間	回数	区域
中方面警防隊	33台	58	40	33	●難波町、昭和通地区　●築地地区　●武庫町付近 ●尼崎、豊中線以西～県道豊中、尼崎以北
東方面警防隊	41台	73	45	41	●ＪＲ宝塚以西～五合橋線以東　●稲葉荘、西立花地区（道意線以西） ●戸ノ内地区　●常吉、常松地区　●県道尼崎、宝塚線以東（道意線以西）
西方面警防隊	48台	90	50	48	●県道尼崎、宝塚線以西（ＪＲ東海道北）　●武庫之荘地区 ●田能、椎堂地区　●道意線以西～県道尼崎、宝塚線以東 ●県道尼崎、宝塚線以西～県道豊中、尼崎以北
北方面警防隊	46台	73	52	46	●五合橋線以西～道意線以東　●塚口町、塚口本町地区　●東園田地区 ●常松２丁目（山陽新幹線北）　●県道尼崎、宝塚線以西～山陽新幹線北
消防部本部	20台	42	28	20	●ＪＲ宝塚以西～五合橋線以東　●五合橋線以西～道意線以東 ●県道尼崎、宝塚線以東（道意線以西） ●県道尼崎、宝塚線以西～武庫川堤防
合計	188台	336名	215H	188回	

■ 1月31日から消防局独自での広報活動を所轄署ごとに実施、3月1日現在、出動車両321台、出動人員1030名、活動時間348時間となっている。

	出動車両数	出動人員	時　間	回数
中方面警防隊	80台	260名	86時間	80回
東方面警防隊	76台	246名	80時間	76回
西方面警防隊	78台	252名	84時間	78回
北方面警防隊	87台	272名	98時間	87回
合　　計	321台	1,030名	348時間	321回

●市外応援

尼崎市消防局では、兵庫県広域消防相互応援協定に基づき、阪神地域ブロック代表消防本部として、阪神地域消防本部の芦屋市、西宮市及び神戸市への市外応援計画を作成し、阪神地域の消防本部は当計画に基づき、1月17日から2月10日にかけて消火活動、救急救助活動及び遺体搬送等の市外応援を実施した。

阪神地域市外応援

応援市町村	台　数	人　員
尼崎市	39台	138名
伊丹市	22台	80名
宝塚市	12台	38名
川西市	20台	61名
三田市	27台	92名
多紀郡	14台	44名
氷上郡	8台	31名
猪名川町	23台	62名
阪神地域市外応援合計	165台	546名

●消防団の活動状況

■ 市内での活動

震災発生後、直ちに尼崎市消防団本部を開設、市内6地区においては各支所を拠点として地区団本部を開設した。

震災当日には、ほぼ尼崎市消防団の全車両、全団員が出動、火災・救助・ガス漏れ出動、警戒・調査出動のほか道路、家屋の被害状況調査、給水、交通整理にわたるなどの活動を実施した。

震災後の約1週間は、尼崎市消防団の約半数の車両、団員が出動、警戒・広報活動を中心に市民の要請にも応じた活動を展開した。

特に17日発災当日火災発生の現場へは各分団が転戦を重ね、火災の延焼を局限にくい止めた事は特筆すべきである。

その後の活動も続き、各地区において100ｔ防火水槽から、生活用水の給水救援活動を行った。特に避難者への食事の配送を消防団で行っている地区は、５月の連休明けまで続いた。

消防団の活動の状況　　平成７年２月末現在

活動内容	出動車両計	出動人員計
火災・救助・ガス漏れ出動	72台	368人
広報・警戒・調査出動	392台	2,011人
その他（物資搬送等）活動	475台	2,467人
総計	939台	4,846人

■ 市外応援

阪神地区消防団長が協議し、５市１町の消防団が応援協力することを決議、芦屋市には尼崎市、宝塚市、三田市が西宮市には伊丹市、川西市、猪名川町がそれぞれ受け持つことになった。

任務として、被災の大きい地区における不明者の検索活動であり、消防本部の現地指揮者の指示により、地元消防団員の案内で見落としの無いよう検索した。

また、兵庫県消防協会長の要請により兵庫県庁で救援物資の振り分け作業活動を実施した。

月日 時間	車両	人員	応援先	任務
1月18日 15:00～日没	4台	15人	芦屋市	消防本部待機
1月19日 13:00～日没	5台	29人	芦屋市	人命検索 避難状況確認
1月20日 9:00～日没	8台	45人	芦屋市	人命検索 避難状況確認
1月21日 9:00～日没	7台	34人	芦屋市	人命検索 避難状況確認
1月23日 9:00～23:00	12台	64人	県庁	救援物資の振り分け作業
1月28日 9:00～日没	7台	38人	芦屋市	人命検索 避難状況確認
合計	43台	225人		

市外応援に対する
消防団長の激励

●共同防災組織
（尼崎地区石油コンビナート等特別防災区域協議会）

倒壊した初島大神宮境内での炊き出し

区　分	対応機関	対　応　内　容
陸上隊	発災直後	加盟各事業所の被害状況確認を実施した。 （緊急出動要請に結びつく被害は無かった）
	1月17日 〜 2月中旬	緊急事態に備えて次の態勢を整え待機した。 1　3点セットにホース(18本)を積み増しした。 2　道路事情が時間とともに大きく変化するため、その都度周辺道路を調査して、緊急対応可能なルートの把握確認に努めた。
海上隊	発災直後 〜 1月21日	人員・資機材について、緊急出動に備えるとともに関連事業所岸壁及び周辺の監視巡回を実施した。

●自主防災組織の活動状況

活動状況については詳細に把握していないが、市内の被害状況から見て、各地域での救出・応急救護等に日頃の訓練の成果を挙げたものと予想される。

確認している活動状況は次のとおり。

武庫川堤防道路・大庄地区

クラブ名	月　日	人員	活動内容
ひまわり婦人防火クラブ	1月25日〜28日(4日間) 2月2日〜4日(3日間) 2月1日及び4日〜10日 (8日間)	延べ 29人 延べ 24人	避難者への給食支援 (炊き出し) 避難者への給食支援 (炊き出し)
塚口東地区第一婦人防火クラブ 塚口東地区第二婦人防火クラブ	1月25日〜27日(3日間)	延べ 30人	避難者への給食支援 (炊き出し)
道意地区婦人防火クラブ	2月6日〜20日(15日間) 19:00〜21:00	延べ 75人	避難者へ給食等の配付協力
三和本通自主防災隊 1番街　自主防災隊 4番街　自主防災隊 5番街　自主防災隊 新三和　自主防災隊	2月1日〜3月31日 0:00〜 5:00	毎晩 10人	不審火に備えてのパトロール (フレームチェッカーを設置したことにより、終了)

●他機関等への応援要請の状況

■自衛隊

立花町３丁目の火災現場における捜索活動に、支援を頂いた。

１月17日21：00　先遣隊２名が北消防署長と現場踏査後北消防署にて打ち合わせを行った。

１月18日７時頃、陸上自衛隊の車両５台・隊員61名が北消防署に到着し、警察と調整のうえ、８時00分から捜索活動を開始。同日16時40分頃、捜索活動を終了した。

■民間機関

災害対策本部から、立花町３丁目の火災現場における捜索活動を依頼。

１月17日11時00分から23時30分までの間、重機１台（バックフォー）・ダンプカー２台（各ダンプカーが３回廃材を搬送）が、捜索活動に従事。

更に、18日８時頃から捜索活動終了の16時40分頃まで、重機７台・ダンプカー10台が捜索活動に従事した。

●災害復興本部等への職員派遣

■相談窓口

１月20日から本庁舎内にり災者を対象とした総合窓口が設置され、消防部は「電気、ガスその他防災に関する相談」を担当、毎日１名の職員を派遣した。

相談件数　95件　（１月20日～２月19日）

■災害復興本部

１．災害廃棄物担当

災害復興本部へ、第１次派遣として３月９日から５月31日まで課長補佐２名、係長２名、計４名を派遣した。

第２次として６月１日から６月30日まで２名を派遣した。

２．家屋倒壊調査

第１次　建物の被害調査に消防部本部から６名、各方面本部から24名、計30名を、２月14日から２月23日まで復興本部の家屋倒壊調査班へ派遣した。

第２次　３月４日から３月13日まで消防部本部から３名、各方面本部18名、計21名を派遣した。

第３次　３月22日から３月31日まで消防部本部から２名、各方面本部から８名、計10名を派遣した。

第４次　４月10日から４月30日まで消防部本部から１名、各方面本部から５名、計６名を派遣した。

震災現場から――消防職員・消防団員の手記

阪神・淡路大震災発生直後の情報指令課の対応

尼崎市消防局警防部
情報指令課課長補佐　消防司令
川崎武一郎

平成7年1月17日（火）情報指令課指令第1係当務員は9名で、3名が勤務中、6名が仮眠中であった。午前5時46分頃、ドーンという音の直後に横揺れが激しく4階で仮眠中の6名は5階の指令室へ入るのが精一杯であった。この仮眠室から指令室まで真っ直ぐに歩くことが出来ず壁伝いに歩き、全員で指令管制業務の対応に努めた。

市内の5電話局から計32本の119番回線全てのランプが点灯し、7台の受付台で119番受報に対応したが、次から次へと出動要請があり、一時パニック状態に陥ったが市民の要請に全力を傾注した。

5時46分地震発生時から24時迄の間、119番受報件数は1,995件であった。地震発生後は同時多発火災発生の通報、救急要請、救助要請、ガス漏れ通報等119番要請が続いた。

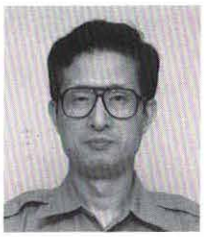
多発火災については原則的に所轄対応でと、判断し無線で指令した。救急要請では指令員の適切な判断で重症者を優先的に救急出動させ、軽傷と思われる傷病者については、近くの病院を紹介し自力対応を要請した。更に救急隊員には病院の手配等救急隊員独自で対応させる等の非常事態であった。

また、ガス漏れ通報も続々と受報し、消防隊の出動もままならず、指令員がガス漏れに対する処置方法を指導し、応急措置を取るよう要請するなど一種の戦争状態であった。

6時10分第1号防災指令発令、防災センター3階会議室に消防部本部を開設、消防部長の指揮のもと指令室と連携を密にし、情報の収集、伝達、災害対策本部との連絡、各方面部への指示、指令を全課員が全力を挙げて行った。通信機器、特にコンピュータが万全であったのが大きな力であり又たのもしい限りであった。

兵庫県南部地震に伴う活動記録

尼崎市中消防署
消防司令補
本野新一



兵庫県南部地震の発生した平成7年1月17日午前5時46分には、中消防署の2階で仮眠中で、生涯味わったことのない経験をすることとなった。それは、筆舌に尽くしがたい激しい縦揺れと横揺れで、全く動けないまま10数秒の揺れであったであろうか、これは尋常ではないと直感し、事務所へ予備の携帯無線機を取りに行く。

1階車庫へ下り、出動に備えると同時に、「昭和通1丁目で、倒壊家屋に生き埋め、中3・中9・尼6出動！」との、指令が入る。

現場到着と同時に、再度驚嘆することとなる。木造2階建重層長屋の中央部分が、鋭利な刃物で切断したように縦に真っ二つに切れており、東側部分の2階と1階が完全にペシャンコ、とても生存者がいるとは想像できない光景である。どこが2階でどこが1階であったのか判然としない。要救助者の助けを求める声も聞こえないため、どこから手を付けて良いものか、皆目見当がつかない状態である。また、声を掛けても全く反応はない。

他の隊員と共に、手探りの状態で瓦等の瓦礫を取り除き救出を開始する。道具と言えばスコップ・バール、そしてこの2本の腕である。気は焦るばかりで数時間位した頃に、1カ所から「助けてくれ！」との反応があり、やっと高校生らしき男性1名を救出する。

その後も作業を続け、弟1人・妹2人を救出する。数時間後に、大きな梁の下に母親を発見するが反応はない。大きな梁をクレーンで持ち上げると、周囲の瓦礫がふさがって逆効果である。付近住民が「ノコギリ」で梁を切断してくれ救出できたが、結局助からなかった。救出完了したのは12時00分で、この時程無力感を味わったことはない。

今回の地震で、ユンボなどの建設資機材の重要性を認識した次第である。

大震災を体験して

尼崎市東消防署
消防司令補
河本博志

夜明け前の静寂の中、大地を引き裂くような轟音とともに都市生活を破壊した阪神・淡路大震災の救急活動は、地震発生直後の負傷した付近住民の駆け込みから始まった。電話回線の不通により収容先病院との連絡もとれず、病院の被害状況も把握出来ないまま救急隊の判断により当直医師との直接交渉から始まった救急活動は、終わりのないエンドレステープのような感さえあった。

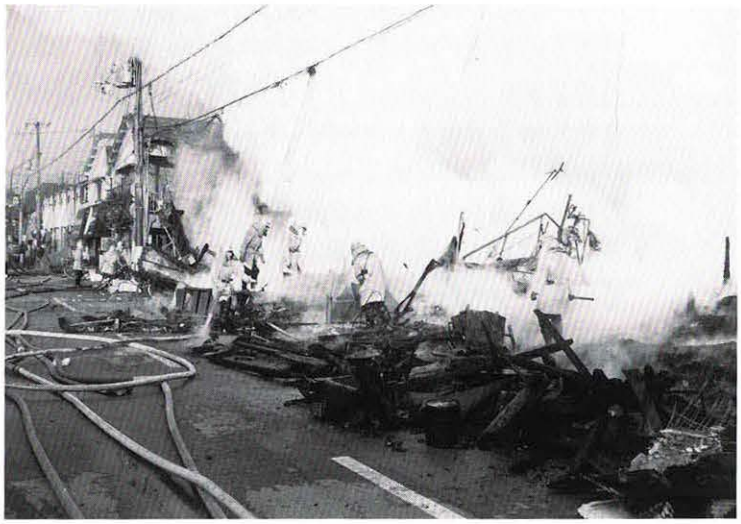
家族の安否も確認できないまま災害活動に従事した職員。住居、家族に被害がありながら職場に参集した職員。全国の消防から被災地に寄せられた援助の手。この災害を通じ消防職員の強い使命感、誠実さと連帯感を感じ、消防職員であることを誇りに思ったのは私だけではないはずである。しかし、同時に自然災害の前に災害活動の限界を感じ、消防・救急に諸問題を提起したことも事実である。

地震当日8時30分頃、全壊した家屋の中から60歳代の女性が消防隊によって救出された救急事案があった。彼女の顔は蒼白であったが、こちらの呼びかけに応じる程度の意識があり、頻呼吸、頻脈であった。近所のおばあちゃんが「がんばりや」と声を掛けていた。夫はこの女性の前に救出されたが、下顎の死後硬直が認められたため不搬送とした。傷病者は夫のことは何も知らない。何とか助かってほしいという感情がこみ上げてくる。搬送先を直近の救急告示医療機関と決め、機関員に告げ車を走らせた。酸素投与をしながら病院につくまでの数分間に意識レベルが低下、呼吸も弱くなり血圧は60㎜Hg迄下がっていた。全身を手で押さえながら負傷部位の観察を行うと骨盤に少し動揺が認められた。病院に着くと、隊員が直ぐに交渉に走った。この間にも傷病者のバイタルサインが低下して行く。隊員が収容不能ということを告げてきたので私は直ぐに医師と掛け合い状況を説明した。しかし、医師は処置室で負傷者の縫合をしており手が離せず収容できないと言った。このままでは心停止になると思ったため、医師に輸液を依頼した。医師が看護婦に輸液を指示し、救急車内で輸液をしていただき、輸液の急速滴下により何とか血圧を維持しながら関西労災病院に搬送することができた。

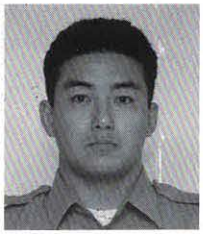
現行の救急救命士法では特定行為は心停止状態でなければ実施できないが、もし看護婦が輸液を実施してくれなければ、緊急避難的に自分で輸液を実施していたかもしれない。また、今回の地震では心停止状態であっても医療機関との連絡がとれず医師の指示が得られなかったため、現場で悔しい思いをした救急救命士も多くいたと思われる。

今回の地震では、平常時には十分機能している制度、法律が弊害となって柔軟な対応できなかったことが多々見受けられた様に思う。

震災から10カ月が過ぎ、ようやく市民生活も平常に近づきつつある。この教訓を今後にいかしていくことが震災を経験したものの使命であると感じた。



震災後の火災に出動して



尼崎市西消防署
消防士
橋本　貴

突然、激しい揺れに襲われ、仮眠室を飛び出した。1月17日未明のことである。車庫へ向かい、一斉に動きだした他の隊員と共に出動の準備を急いだ。

まもなく、家族が家具の下敷きになっているとの一報が入り、救急隊が救出に向かった。続いて通りかかった運転手から火災発生を知らされ、私は水槽付化学車で出動した。

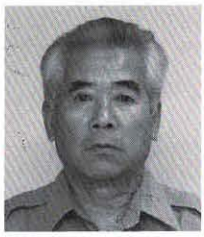
現場に到着すると、アパートの一室から炎が上がっている。中隊長の指揮により直ちに消火活動に入った。しかし、暫くして構えた筒先からの水が止まった。何事かと思いポンプを操作する機関員の方を振り向くと、消火栓から水は出ず、積載水も底をついたとのことである。一瞬、頭が真っ白になった。

それでも活動を止める訳にはいかない。気を取り直し近くの防火水槽をあたった。その間にも炎は猛烈な勢いで拡がって行く、無線は家屋倒壊や火災の続発を伝えている。応援隊の到着などとても期待できない。活動が困難を極めたそのとき、中隊長が私を呼んだ。中隊長は炎を吹き上げるアパートの外壁と塀の間にプロパンガスボンベが並ぶのを見逃さなかった。すぐに搬出しなければ危険な状態である。早速、取り外しに掛かった。今にも爆発しそうで冷や汗が出たが何とか無事に運び出した。間もなく西消防署のポンプ車が付近の防火水槽から送水を始め私は延焼を阻止すべく放水を再開した。必死で放水している最中、人の気配を感じて振り向くと、焼け出された男性が炎を見つめてたちつくしていた。あわてて筒先を置き安全な場所まで連れだした瞬間、私たちがいた所に燃え尽きた建物の一部が大きな音を立て倒れてきた。正に間一髪であった。

その後も、辺りがすっかり明るくなるまで懸命な放水活動が続きやっと鎮火に至った。

この火災で私は、地震直後の火災ではどれ程消火活動に不利な条件が重なるか嫌というほど思い知らされた。

恐怖の地震体験から



尼崎市北消防署
第1消防係長 消防司令
森本昭男

通信室を出ようとした時だった。ドーンと突き上げる激しい衝撃に一瞬「何だ！ これは」と、続いての激しい横揺れで「うわ！ 地震だ」と気づいたが歩くことが出来ず壁際で身を伏せるのがやっとだった。大きな揺れは20秒位でおさまったように感じた。

通信室の自動火災報知設備のブザーが鳴り響いていた。これは大地震だと直感し玄関を出て、庁舎被害等を調査したが大きな被害は見受けず、庁舎前の住宅街の道路はあまりの大きな地震の為か、人影はなく一種異様な静けさであった。直ちに全隊員の安全を確認、携帯無線機を開局、高所見張り、出動体制強化等の初動措置を指示しているとき、数名の人が駆けつけ「ガス漏れしている。」との通報を受け、出動を検討中、他管内で火災発生の無線を傍受、次いで管内の火災の駆けつけ通報を受け消防車2台で出動した。

現場に到着すると、傾いた木造長屋住宅1棟が炎上中で、タンク車は火掛かり、ポンプ車は消火栓に部署しタンク車に中継を指示したが給水不能の為、防火水槽に部署するよう指示した後、無線で応援要請したが「北署の2台で処理せよ」との返答、一時は呆然とする。水量不足のため直ぐに西側共同住宅に延焼した、ポンプ車からの中継送水を待ちながら、燃え盛る火をどうすることも出来ず悔しさが一杯で再度応援出動を要請した後、隊員と共に西側棟の傾いた木造共同住宅の一階窓から屋内進入し、腹這いで建物の倒壊危険に晒されながら人命検索をしたが応答は無く更に進入し検索中、この棟にも火が移り、顔が熱く耐えられなくなって、これ以上留まる事は危険と判断、断念せざるを得なかった。その後応援隊が到着し、防火水槽、学校プールからと遠距離中継送水により共同住宅等5棟を焼失して、3時間後に延焼を阻止し、7時間後ようやく鎮圧状態になったものの、行方不明者

が10数名あり休むこと無く、自衛隊の協力を得て、警察、消防との合同で捜索、２日間を要し不明者全員を確認、一旦活動を終了した。

帰署すると消防署は北部防災センターを併設しているため250名ほどの避難者でロビーや廊下にまで溢れており、５月上旬まで避難者の対応をしたがボランティアの方々の献身的な協力を得て貴重な体験をした。

地震当日の中隊長として非常に残念な事は、火災で11名の焼死者を出し、もっと何か出来なかったかと無力感で一杯である。もし、遠くても最初から防火水槽に部署を指示していたら、10t、20t程の水源車があったらもっと助かったのではと、色々思い浮かぶ反面、消防力には限界があり、地域住民の自主防災活動の意識づくりを進めることが大切なことだと痛感した。

阪神・淡路大震災における活動体験

尼崎市消防団
大物分団 分団長
宮元善雄

１月17日（月）５時46分、私は自宅の２階で就寝中、突然「ドーン……ガタガタ……」と激しい縦揺れ、横揺れのため慌てて飛び起きた。

水屋の食器等の破損があるものの、幸いにも自宅には大きな被害は無かった。

地元の被害等が気になったので懐中電灯を取り出し外へ出ると外はまだ薄暗く数名の近所の住人が心配そうに話をしていた。私は近所の住人に「大丈夫ですか、怪我は無かったか！」等の声をかけながら自宅周辺の被害の状況について見て回った。薄暗くて詳しい状況はわからなかったが壁及び瓦の一部落下等は認められたが建物の倒壊等は見られなかったので大物分団器具庫に行き消防自動車の出動体制を整えてしばらくした頃、無線受令器から「昭和通１丁目13－19で民家が倒壊し数名が下敷きになっている模様」等の一報が流れたため消防自動車で現場に向かった。

現場は木造瓦葺住宅の２棟が完全に倒壊し悲惨な状況であり、既に常備消防が到着、救助活動中であり付近住民が心配そうに見守っていた。又、伊達副分団長、堀連絡員等が救助活動の補助をしていたので私は団員に声をかけるとともに救助活動を実施し、12時00分頃まで続いた救助活動の結果、倒壊建物の下敷きになった６人中、１人が死亡したが５人を救出することが出来た。

救出後、一旦器具庫に戻り午後から集まって来た団員等と受持ち区域内の被害状況調査及びパトロール等を実施中、地域内でガス管の破損を発見したため中消防署に連絡するとともに同地域周辺の広報活動を実施した。又、受持ち区域内で道路の損傷があったため注意を促す広報活動を合わせて実施した。

その後の主な活動として、大物分団の市外応援活動は次のとおりである。

１月21日（土）９時30分から16時00分まで芦屋市潮見町、緑町付近の倒壊家屋等行方不明者の捜索及び救出作業等に機関員の松元信三君、団員の村上勉君そして私の３人が参加。

１月23日（月）８時00分から23時45分まで兵庫県庁救援物資集積場で、救援物資の搬入受入れ及び避難場所への搬入作業に団員の村上勉君が参加。

１月28日（土）９時00分から15時45分被災地（芦屋市）一斉ローラー作戦に参加。

以上が大物分団としての主な活動であるが、私は今回の大地震の体験、活動を通じて学んだ教訓を今後の消防団活動に生かして行きたいと思います。

終わりに、亡くなられた多くの方々のご冥福を心からお祈りいたします。

阪神・淡路大震災を経験して

尼崎市消防団
杭瀬分団 分団長
井内　進

阪神・淡路大震災、それは余りに突然で全く予期せぬ出来事でした。

私が消防団に入団してからの38年間の中で、最も短く又、最も長い1日となったあの日を、今も鮮明に覚えています。

体に激震を感じて目覚め、寝床から飛び出して立ち上がったものの、それからは身動きできずに居りました。震動が収まるまで待ち、家族の安否を確かめた私はすぐに分団器具庫へと向かいました。その途中で動揺した様子で外へ出ておられた数名のお年寄りが私の傍へ駆け寄って来られましたので、近所の自動車教習所へ誘導したのち、分団器具庫へ急ぎました。消防団員に非常召集をかけパトロールを指示し、杭瀬社会福祉連絡協議会会長に分団器具庫に待機している旨を連絡しました。

待機中に、各町会の役員の方々が防具も身につけずに通行して居られる様子を見て、常備してあるヘルメットを被ってもらったということもありました。

また、地域内のマンションの住民から救助の要請もありました。家具の下敷きになり、腰を負傷したが救急車が全て出動して来られないので病院へ搬送して欲しいということで、我々は直ぐさま近くの大隈病院へ搬送しました。

時間の経つにつれ、各所でガス漏れが続発したため団員が交代で日没まで警戒出動をしました。

後日、芦屋市消防団の方々と合同で住民の安全確認の為のローラー作戦を実施したとき、一人の消防団員が「私の父はこの倒壊した家の下で亡くなったのですよ」と話されました。家族を失い、住宅が倒壊し、全てが大混乱しているいる中、消防団員としての使命を果たすべく、無念さを堪えて活動しておられるその姿をこの目にして、涙がこみ上げてくる思いで、「これぞ、消防精神だ！」と感銘を受けました。

大震災は、人の心を荒ませただけではありません。正義と勇気をも呼び出しました。そしてこれを機に、今後も私自身が一消防人として一層力を注がんと心新たに決意しました。

震災と消防団魂

尼崎市消防団
道意分団 分団長
平山茂樹

阪神・淡路大震災に依り、犠牲になられた多くのみたまに哀悼の誠を捧げますと共に、遺族の皆様と甚大な被害を受けられ、また、仮設住宅で不自由な生活をされている多くの皆様に心よりお見舞い申し上げます。

震災後10カ月が早くも経過しましたが、今なお余震が絶え間なく続いている今日、市民の皆様には復興に向け力強い努力をしてこられたと思います。

激震とともに夜が明け、我が住宅街の変わり様を目のあたりにし、早々召集で6名の団員と地区の若い者15名で消防器具庫東側の道路上に30mにおよぶ崩壊した土塀の撤去作業と地区内の被害状況の確認、大庄支所内消防本部との連携をとり被害状況の連絡にと団員共々休む間もない日となった。

19日より3日間、芦屋市へ建物崩壊等による人命検索活動に参加した。尼崎市消防団員、消防職員、各副団長等70名が消防団長の見送り激励を受け出発、目的地芦屋市到着後3隊に分かれ、駅前から山手へと寒風の中の人命検索活動である。12時に全員集合場所に戻り、冷たいにぎり飯2個と冷たい水で、コンクリートの歩道上での昼食ではあったが誰一人不平を語る者もなく、また、午後より検索に出発、日没と共に終了し帰団した。

この救援活動の数日の中で、兵庫県庁への救援物資の整理に昼の部、夜の部と任務に当たり出動した。我が消防の仲間と共の活動であった。

消防団の沈滞が危惧されている中、消防本来の目的である、自然災害から身を挺して守ってきた

先人達の情熱、心意気、さらに意気高揚が滞ることなく、この歴史に残る大震災で我が消防組織の団結を誇りに思い、若い人達の地域防災に参加できる根幹となり、消防の仲間と共に郷土の礎になればと念願しております。

歴史に残る記録誌として発刊に当たり関係する皆様にお礼申し上げます。

阪神・淡路大震災の日

尼崎市消防団
東富松分団 分団長
宮本　勉

地震・雷・火事・親父、昔から怖いもののベスト4である。とりわけ地震は対岸の火事のように思っていた。しかし、現実に阪神間に起こったのである。

ガタ、ガタ、ド、ドーン、いったい何が起こったのか？　夢うつつの中、タンスが私の上に乗っていた。家族の無事を確認し、間もなく消防無線が火災発生を知らせていた。立花町3丁目の共同住宅だ。私の勤務先北約300mである。

1階に降り台所を通るとバリ、バリという音、食器類が散乱している。玄関を出ると既に南の空に黒煙が上がっていた。分団器具庫に行くと既に団員がきて消防車を出していた。

現場に着き消火栓から放水を開始したが水圧が上がらない。他の分団から2線放水をした。横の民家にも火の手が上がった。背後から「消防の兄ちゃん、そこの家の人は、田舎に帰っていて、今、留守やねん、はよ消したって。」

必死で放水するが力及ばず炎上してしまった。後日この共同住宅からは11名の方々の遺体が確認されました。

23日、兵庫県庁へ救援物資の振り分け作業の依頼があり出動した。道中、ニュース等で見た建物の倒壊が目に飛び込んでくる。改めて自然の脅威に身が竦んだ。兵庫県庁の駐車場には全国からの救援物資が届けられていた。職員より指示された品物をトラックに積み込む。昼食時、冷たい弁当を食べながら避難されている人々の救援物資を待って居られる姿を思うと胸が熱くなっていた。

被害に遭われた方々には、今後厳しい日々が続くことでしょう。しかし、自然の力に負けないで下さい。再建を目指して努力されることを心よりお祈り申し上げますと共に亡くなられた方々のご冥福を祈り、合掌。

阪神・淡路大震災の活動報告

尼崎市消防団
東武庫分団 分団長
宮本和男

1月17日、早朝、悪夢のような出来事、我が東武庫分団は6時からガス漏れやけが人の有無の確認のための広報と共に、高齢者や女性だけの所帯の無事を確認しながら……。当地区では倒壊家屋が3軒あったが全員無事であった。

町会長から飲料水供給の依頼があり独断であったが公園に設置されている耐震性100t防火水槽の水を団員13名で1日中多くの住民に給水し、翌日も午前中はガス漏れ等の広報活動を実施し、午後は夕方まで給水活動した。更に給水支援活動としての交通整理を夜9時半まで団員10名で実施後、守部分団と交代した。

19日は芦屋市消防本部へ副団長、宮本、秋永、辰、魚住一也の4名、常吉分団員4名、計9名が車両2台で応援出動した。指定された春日町地区をローラー作戦で地域住民の安全確認を実施した。この地を見て「なんて凄い出来事だったのか。」と痛感した。翌20日も副団長、宮本、増田の3名で早朝から夜8時迄、大原町、朝日が丘等昨日同様の任務を実施した。その途中、70歳位の婦人が「震災後初めて訪ねてくれた。」と涙を流して喜んで戴いた。被害の大きな所には直ぐに多くの人が集まって来るが、小さな所へは訪ねて来る人が遅れ

たので、被災した多くの人々が消防団員の顔を見て安心されたことは不安であったのだろうと思う。

23日は武庫地区の5分団から宮本、浅堀、竹島、松井、西治の5名で夕方から23時迄兵庫県庁へ救援物資の仕分け作業の応援をしたが作業中にも地鳴りとともに震度3の余震があり全員がひやひやしながら作業を続行した。

帰路、明かり一つ無い道の為道に迷い、43号線に出てしまった。高速道路の橋脚に多くのひび割れがライトに照らされ何とも言えない不気味さを感じ、早々に2号線に出ようとしたが途中何箇所も電柱が倒れたり通行止めの所が多数有り、やっとの思いで地元武庫地区に足をいれたのは0時を大きく過ぎていた。28日も一日中芦屋市消防本部の応援でシーサイドタウン等の地域住民の安全確認を実施した。

団員の協力で事故もなく任務に就けたことを感謝します。消防団員は今回の大震災により個々の防災意識を持つことが大切、且つ必要と思いました。

阪神・淡路大震災の体験と園田第10分団の活動報告

尼崎消防団
園田第10分団 分団長
竹 内 征三郎

1月17日午前5時46分地震発生。戸の内南ノ町132戸のうち、ほぼ半数が全半壊しました。戸の内町は、東は旧猪名川、西は藻川の下流にできた中州で、尼崎市内でも特に被害が大きかった地域です。消防団員17名中14名の団員にも全半壊の被害がありました。後日、住山副団長より要請があり芦屋市消防団の応援に行き、更に県庁へも救援物資の仕分けの応援にも出動した。

1月29日、藤井北消防署長から戸ノ内橋詰の水道管修理のため22時から6時まで戸ノ内一帯が断水するとの連絡を受け、徹夜で警戒をしました。

被災者の食事を朝夕2回3月20日まで一日おきに消防車で避難所へ運搬しました。朝班の者は会社を休むか遅れていき、夕方班は会社を早退して活動しました。

1月30日、正副部長会議が園田支所で開かれその最中に無線が「火災指令、場所戸ノ内町3丁目……竹内自動車工場……」慌てて第3分団の消防車で出動しました。第2分団員の協力で可搬ポンプを分団器具庫より運び出し、旧猪名川から水を取り出動した他隊との連携で無事消火できた。火災現場は南隣の工場でしたが、家族が消火器をもって活動しているのには驚きました。

幸い誰もけが人を出すこと無く消火できました。お陰で工場の消火器は一新されましたが、もし、火災が前日の夜の全面断水のときに発生していたらと考えると恐ろしい事です。

地震と火災で私の頭はパニック状態でした。協力していただいた皆様、本当にありがとうございました。

震災のすごさと救助活動に従事して

元尼崎市消防団
常吉分団 分団長
中 村 孝 司

そろそろ起きようと思っていると軽く揺れたような気がした。夢うつつでいると、今度はジェットコースターに乗っているような激しい突き上げと揺れに襲われた。揺れがおさまり我にかえるとタンスの下敷きになり体が動かない。

幸い顔の方は枕元の棚が止めてくれた。しかし、抜け出すのに5分位かかったと思う。大声で家族の安全を確認して外に出た。周りを見渡してみたかぎりでは家屋の倒壊はなかった。しかし東の方に煙が見えたのでパジャマ姿のままで器具庫に駆けつけた。シャッターがずれてしまい消防車が出せない。気ばかり焦り手間取っていたが村の人の助けもあって何とか出動できた。現場に着いていざ放水というところで、今度は水が出ない。断水だ。これで万事休すかと悔やんでいると殆ど水の

でない川に泥水（液状化現象？）が流れてきてぼや程度でくい止めることが出来た。消火活動を終え広い通りにでたら、常松の人が近所のアパートが倒壊して住人が下敷きになっていると知らせにきた。

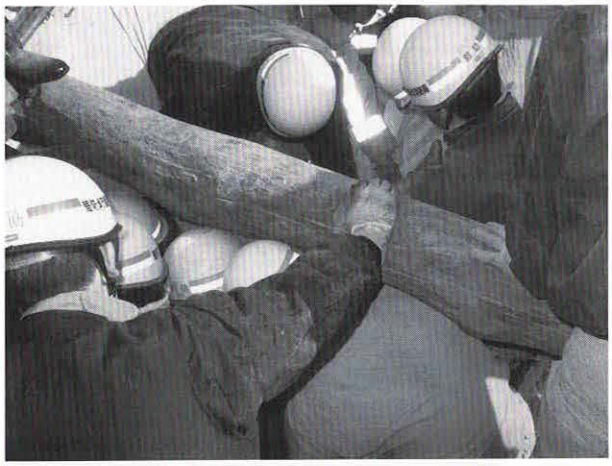
受持地区の調査が終わっていないのにと抵抗があったがとにかく出動した。途中新幹線の橋桁が１m近く下がっているのを見てこれは只事でないと思った。現場は１階部分が潰れ２階の窓が目の高さに来ていて、その光景を見たとき血の気が引いた。改めて自然の凄さを思い知った。

消防団に入って15年になるが救助活動の経験はゼロである、中からは「助けて。」と人の声がする。何とかしなければ、とにかく力任せに２階の床、１階の天井を破り直径１m位の穴を開けた。我々は「のこぎり」と「バール」が欲しかった。開けた穴から住人が埃まみれになって出てきたとき、周りから拍手が起こった。この時の嬉しさは何にも例えようのないものでした。その喜びも束の間、「奥に息子がいるのです。」という言葉で重苦しい雰囲気に包まれた。我々の手に負えず救助隊を待ち一緒に活動し30分後に無事救出出来た。次々に救出された人々が病院に搬送され、当分団も西武庫病院へ患者を搬送したが病院での光景は正に野戦病院さながらであった。何処まで被害が拡がっているのだろうかと不安になりました。

一段落して器具庫に帰ったのが午後２時を過ぎていた。

あっと言う間の８時間であったが全くと言っていい程「情報」が入らず、いらいらしました。ラジオがあればもう少し情報が入ったと思います。今後消防車にラジオを搭載して大災害時には情報を流してみるのはいかがでしょうか。

私は、平成７年３月31日で退団しましたが、防災活動には今後も全力をあげ協力をして行きたいと思います。



地震防災シンポジウム
安全都市あまがさきをめざして

と　き　平成7年6月5日
14：00～16：30

ところ　尼崎市中小企業センター

主　催　尼崎市消防局

共　催　尼崎市防火協会
尼崎市防火協会危険物安全委員会

後　援　(財)尼崎市防災普及協会

尼崎市で地震防災シンポジウム開催

阪神・淡路地域を襲った兵庫県南部地震は、尊い人命と市民の財産を一瞬に奪い去り、都市基盤に大きな被害をもたらし、市民生活に多大な影響を与えました。

尼崎市においては、今回の地震災害を教訓とし、市民の提言、事業所等の意見を踏まえながら、一日も早い震災復興と地域防災計画の見直し充実が図られているところです。

このようななか、市民、事業者及び行政が一体となって災害に強いまちづくりを推進していくため、尼崎市防災専門委員による地震防災シンポジウムが6月5日午後2時から4時半まで同市の中小企業センターで「安全都市あまがさきをめざして」をテーマに、市内の事業所防災担当者、自主防災組織、防災関係者500名が参加して開催いたしました。

尼崎市は、平成元年に都市防災、電気、化学、構造工学関係の大学教授5名による防災専門委員制度を発足させ、専門的な指導・助言を受けているところです。

今回のシンポジウムでは、これら専門委員の地震体験を踏まえた提言などを紹介します。

第一部

基調講演

「阪神・淡路大震災から学ぶ今後の街づくり」

講演者

神戸大学工学部教授

高田至郎（たかた しろう）

【経　歴】

昭和19年	生まれる
昭和42年	京都大学工学部卒業
昭和44年	京都大学大学院 工学研究科修士課程修了
昭和47年	京都大学防災研究所助手
昭和49年	京都大学大学院 工学研究科博士課程修了
昭和49年	神戸大学工学部助教授
平成４年	神戸大学工学部建設学科（社会環境工学講座）教授

【著　書】「ライフライン地震工学」 その他

今回の地震について最初に断層と地震の強さ、2番目には構造物の被害、3番目にライフラインの問題、最後に今後の街づくりをどう考えていけばいいかについて話します。

北六甲台の自宅で地鳴りで目が覚めました。大学の仲間からの電話でお互いの無事を確認、9時半ごろ、六甲山を越えて大学の方に行く途中、六甲山の上から神戸の街を見たとき黒煙と炎とが街のあちこちに上がっており、その時に初めてこれは本当に大きな被害を引き起こした地震だと感じました。

私は六甲の断層が動いたのではないかと感じた、と言うのは神戸市の地震対策編を作ったのは山崎断層地震が1983年に発生し、その時に神戸市長から「何故神戸には防災対策地震編がないんだ」ということで急きょ作りました。六甲の近くには六甲変動帯という大きな断層帯があり、これを想定に入れなければいけないということは十分に分かっていたが、これを想定に入れると、消防職員や消防署も足りない、道路が今の幅ではせますぎます。ありとあらゆる所に投資をして防災にお金を掛けなければならないです。とりあえず兵庫県や神戸市の地域防災計画地震対策編の想定は震度５の強い方で山崎・枚方周辺・南海道地震を想定して作りました。社会的な風潮では、関西には地震が無いという、特に兵庫、阪神間には地震が無い、そういった中で震度７を想定するのは困難でした。

大学にたどり着き次々に入ってくる被害の状況をテレビで知り私は地震対策、地震防災に係わってきた人間として本当にぽっかりと胸に空洞が開いた感じでした。そのうち地域住民が大学に避難してきたり、学生の安否を掌握するのに終始しました。２日目は夜になって学生が避難して来ても救援物資が来なくて200人位の食事を作りながら２日間を過ごしていました。

大学の先生、学生と２日目の夕方から調査に出掛けました。古い設備であったり古い工法、耐震設計の指針の古い施設が、壊れるべくして壊れたといえるのが８、９割あると感じました。

一般住宅家屋を面的に把握をする事が将来の被災の原因の把握につながるということで調査を始めました。

地震後４日目位に初めて船で大阪に行き、街が正常に活動していて、わずか離れた神戸では30数万人の方が倒れた電柱や垂れ下がった電線の所でテント生活している神戸とは天と地の違いであり、驚きました。

２月に入ると世界中から研究者がやって来て神戸がどんな風に被災し復興していくのか注目していると感じました。被災の状況や復興の状況をきちっと日本、世界に伝え、また、このように大きな犠牲を払った災害を後世の人達に伝えていくことが大きな使命だと考えています。

1　地震の特徴について

今回の地震は野島断層が破壊され最大の加速度が818ガルの加速度で一昨年の釧路沖地震は919ガルという加速度で揺れ、釧路沖地震よりむしろ小さいです。被害の大きさは神戸の方が圧倒的に大きく決して特殊な地震ではありません。釧路沖地震は海洋型地震で兵庫県南部地震は陸地で起こった直下型地震です。日本では福井地震がごく最近に起こった直下型地震であり、この時、気象庁が初めて震度7というのを設定しました。福井地震はかなり前の地震で木造家屋が弱かった、あるいは、十分に耐震対策が出来てなかったという誤解が少し有ったと思いますが、今回同じように神戸の地震で屋根が地面に叩きつけられるように壊れた、これは直下型地震の特徴です。直下型地震としては福井地震と同じように縦揺れと横揺れの両方が重なって壊れたというのが大体の見解になっています。今回の地震は、3回大きな岩石破壊が起こりました。最初は野島断層で非常に大きく破壊があり、その破壊が須磨近くの横尾山断層当たりまで破壊が進みました。こういうのをマルチプルショックと呼んでいます。

地震というのは、元々地球の内部の岩石が破壊され、そして波が出てくる現象ですが今回のを地震学によれば3回の破壊がありました。これは決して特殊な地震でなく断層が壊れれば今回と同じように大きく衝撃的な地震が起こります。

震度7の地域というのは特殊な分布で、須磨から西宮へ更に北東の方向に伊丹、宝塚の方に延び、島状に発生しています。震度7の分布がなぜ島状、ベルト状に出たのか大きな疑問です。このベルト状の下に違う断層が有るのでないかと懸念されています。大きな地震後には必ず小さく壊れる余震はあるが震度7の上にはほとんど起こっていません。

調査結果の一部ですが被災建物は、角地の建物、重い屋根の建物は非常に被害が多い、被害の集中した地域で20年以上の建物はほとんど壊れており15年が境目かといえます。平屋建物、軽量化された屋根の建物は被害が少ないです。2階建は一階が倒壊しても二階が残っているケースがほとんどで一階がピロティ形式のものは壁が少なく柱が少ないので沢山壊れています。3階建以下の鉄筋コンクリートは生き残っています。中層の古い建物は柱と梁の接合部分が随分と壊れたり柱の亀裂が入っています。高層、超高層建物等は基本的には生き残っているが芦屋浜の超高層では鉄骨柱が破断しています。

2　鉄道、道路について

ノースリッジ地震、サンフェルナンド地震等発生したとき、日本ではこんなことは起こらないだろうと言われた安全神話は崩れました。鉄道、阪神高速道路、高架橋等、特に基本的に古い耐震設計基準で造られたものはほとんど被害を受けています。

1981年からの新耐震設計法に準拠したものはかなり今回の地震にも耐えました。但し、基本的には関東大震災級に耐え得るという考え方がベースになっています。阪神高速5号湾岸線は、耐震設計基準の設備だが、液状化、構造形式の不連続性問題で大きな被害を受けています。今後、兵庫県南部地震級に耐え得るという新しい耐震基準の考え方が出てきます。

被害を分析するといろんな要因があります。大きな要因は地盤の影響、先程は構造物が何時造られたか、どういう耐震設計法で造られたかということが問題であったが、新幹線の被害を分析すると、柔らかい地盤から固い地盤に入っていくところ、地盤の不連続部に被害が集中して起こっています。また、地下鉄の構造物が強いと言われていたが大きな破壊を受けた、施設の耐震設計が不十分であった以外にあの地域は旧河道であり地盤が軟弱でした。被害の程度は、地震の強さ、構造物の耐震的な配慮、地盤．地形の3点が重なり、破壊エネルギーに耐えたかどうかによります。

3　ライフラインについて

都市のライフラインは市民生活にとって非常に大切なものであり、こういった観点からライフラインという地震工学が出来上がりました。ライフラインは、エネルギー供給システム（電力、ガス、石油パイプライン）・水供給処理システム（上水、下水）・交通処理システム（道路、鉄道）・情報伝達システム（通信）この４つを言います。こういったシステムは街の発展、拡張に従って出来上がってきたもので、新しい設備も古い設備も街のなかにあり、これまでは末端が壊れるというのは多々あり、中枢がやられるということはあまりなかったです。今回はガス、水道については甚大な被害を受けました。

ライフラインを地震に対し強化しておくことが地震時の人々の生命を守り、その後の復旧復興に人々に活力を与えるという意味からも生命線になります。

4　今後の街づくりについて

震度７の地震が起こってきたときに対応できるような街づくりをどのようにすべきか、先ず命の安全が確保できるということ。つぎに、これまでの関西や神戸には地震対策は何ら必要がないという風潮は今後通用しません。勿論、今後いろんな意味で地震対策は進めていかれるが、命の安全が確保出来る施設造りを進めなければなりません。それでもなお、どんな地震がやって来るかも分かりません。被害をゼロにするのは無理で、被害をゼロにできなければ被害があったときに早期に都市活動が、また、市民生活が回復できる社会システムを造り上げていくことが大切です。地震防災の社会システムは行政が作り、事業者も防災ということに関わって地震対策を進め、何よりも大切なのは一人ひとりが防災に心掛け災害をどの様にして防ぐのかという日頃の思いが早期に回復していく社会システム造りの基盤になっていきます。

防災には、大きな資本が必要であり、一人ひとりが地震災害に強い街をつくっていくという気構えが必要で、また、それが新しい街の発展につながっていくと感じています。

第二部 パネルディスカッション
「安全都市あまがさきをめざして」

コーディネーター
室　崎　益　輝　　神戸大学工学部教授

パネリスト
高　田　至　郎　　神戸大学工学部教授
今　駒　博　信　　神戸大学工学部助教授
山　本　俊　二　　産業技術短期大学教授
大　垣　定　彦　　産業技術短期大学
堂　本　嘉　巳　　尼崎市消防局長

◎室崎教授 —— 最初に今回の地震の特徴を整理しておきたいと思います。

第１点は住宅が沢山壊れ、5,502名も亡くなったということです。死者の８割が家屋の倒壊による生き埋めによるものです。

２点目は大火災が起きて7,000棟が焼失したということです。昨年の奥尻地震で多く燃えたが190棟で今回は如何にとてつもなく広大な面積が灰になったことか。死者の１割が長田区等の火災での逃げ遅れによるものです。

３点目は、ライフライン、近代的な都市を支えている動脈がことごとく破壊されその結果、長期に渡り生活困窮を余儀なくされたということです。近代社会で電気ガス等が止まった時の大きな問題がでてきています。

４点目は、近代的な都市機能麻痺により経済的にも大きな影響を受けたということです。

５点目の特徴は沢山のボランティアが参加したということです。若者の集団が参加したということだけでなく医者のチームなど専門家が入ってくれました。消防団をボランティアというのはけしからんと言われるかもしれませんが大活躍しました。自治会等、色々な助け合いがあったが、これからの貴重な財産として引き継いでいきたいものです。

６点目は、危機管理、今後肝に銘じて地域防災計画を作らねばならないが初動態勢がうまく機能しませんでした。大災害が起きたとき広域応援態勢、自衛隊、その他の応援をも含めて如何にスムーズにするかという緊急時の対応のあり方が問われました。

各先生がたの専門の立場から地震被害、或いは今後の街づくりのあり方についてコメントをしていただきます。

◎今駒助教授 —— 貯蔵所を中心とした危険物施設に対する今回の震災の特徴として、一般の建築物に比べて被害が軽微であったことが挙げられます。

その理由として、従業員、市民、消防関係者の献身的な行動にあったことは勿論であるが大規模な危険物施設、天然ガス発電所、大規模な化学プラント、石油精製設備を有する石油コンビナートが震度７の激震地になかったことが不幸中の幸いでした。

しかし気になる点も２、３あります。まず、原子力発電所も含めて大規模危険物施設がある地域で今回と同じような揺れがあったらどうなっていたでしょうか。

次に、東灘区にＬＰＧ（液化石油ガス）２万kℓタンクが３基あるが、今回の地震でその中の１基に亀裂ができ避難命令も出された。また、不等沈下こそあったが石油タンクそのものがつぶれた事例はなかったものの防油堤には無数の亀裂ができました。

今回の震度の大きかった地域には、幸いにもせいぜい数万kℓのタンクしかなかったが、もし何十万kℓの大型タンクが有ったらどうなっていたでしょうか。最後に、火災も勿論であるが、もし、危険物施設から有毒ガスが大量にでていたらどうなっていたか、以上が今回の震災で気づいたことです。

◎室崎教授 —— 危険物災害が少なかったのはその通りで消防関係者、事業所の防災関係者の方々の必死の努力によりくい止めました。石油基地を最後は全国の消防が総力を挙げて守りきった。危険物に関してはラッキーな面が多かったが、逆に、アンラッキーだったらもっとどんな事になっていたかという話も、もし時間が有れば意見を頂きたいと思います。

◎山本教授 —— 被災を免れた建物でいちばん多いのは鉄筋鉄骨、次いでツーバイフォー工法、そして壁構造の建築物、軽量の屋根構造となっているが、中には昔ながらの瓦葺きの家も激震地で残っているところもありました。そういう残ったのはなぜかということを考え良く調べてみることも必要なことです。木造家屋が何故残ったのかを考えると、振動が起こった時にそれに耐えるだけの材料がじん性に富んでるかが非常に大事で、じん性のある材料、慣性力により起こる剪断力に耐えるだけの基礎と構造の力が有ったか、木造も鉄筋鉄骨であろうと建築物に対する最も基本的な事です。

◎室崎教授 —— 火災に関してもあの広い焼け跡の中で一軒だけ木造が焼け残った所もあります。壊れたものから教訓を得ることも大切だが壊れなかった建物、焼けなかったものからもしっかり教訓をくみ取らねばいけません。

◎大垣教授 —— 電力関係の被害状況、復旧について、今後、送電配電の構築をどの様に進めるかを考えました。震災直後に260万軒という停電があったが３時間後には５分の２の100万軒に送電が再開されました。23日には応急送電が全て完了し他のライフラインに比べ非常に回復が早かったのが特徴です。送電が開始された理由は３つあり、１番は送電、配電系統は地震によらなくても落雷、変圧器の絶縁破壊や事故が送配電系統で起きることがあるので、予てから関西電力では停電範囲を通信やオートメーションを駆使して極小化しており、事故が起きた区間だけに停電を徹底するという体制が出来ていたこと。

第２点は、保安のネットワークが出来ていました。テレビ会議のシステムが完全に構築されており、東京から全国の全営業所と制御所、関係機関等に指令を出し応急、応援体制を迅速に取れました。今後の危機管理、事後処理について如何に情報ネットワークが大切か示唆しています。

第３点は送電するには地中と地上との送配電があるが、今回の場合は地中のケーブルシステムが相当被害を受けたが、地上の架空設備を最大限に生かして地中をあきらめて地上で先ず応急的に送電を行いました。この３点が、たった１週間足らずで応急送電が完了出来たという大きな要因です。今回の地震では、架空設備は応急復旧に非常に役立ちました。今後の送配電の構築は街づくりと一体で進めなければならない、街が完成したという所はどんどん地中化を進めても良いが、今後、まだ、変動が有るという所は架空設備を残しつつ両者適切な組み合わせで進めていく事が大切です。

◎室崎教授 —— 復旧の話で電気が非常に早く復旧したのはそれなりの理由が有りました。日常の便利さと安全性の相互の関係をどう考えるかということです。

◎堂本消防局長 —— 地震直後自宅から車で急いだ、山手幹線を走り途中北部防災センターを見ると健在であり安心し防災センターに入ったのは６時18分でした。山手幹線を東に走るに従い段々と信号機が作動しているではないか、これは震源地は尼崎より西かなと思いました。こちらの防災センターに来ると発電機は動いており、電気も水もあったが、ぞくぞくと血だらけの市民の方々が避難して来ました。急いで救急処置です。

当日は、３連休の後で117名の消防職員が消防隊22隊、救急隊６隊、指揮隊１隊の29隊が勤務をし

ており、先ずこれで対応をしました。

尼崎市の地震対策編については諸先生方にお世話になり、震度６を想定して作成しておったが竹谷小学校にある震度計が５を振り切っておりますから震度６であったのだろうと確信しています。消防職員、消防団員、6,000名の市職員も自主参集になるわけですが、４時間後には消防職員は86％が参集し、市職員も３時間後には43％が参集しました。８件の火災のなかで２件が炎上、１件は826㎡焼失、もう１件は11名が亡くなられ、ここでは1,732㎡３棟を全焼しました。地元の消防団、地域の自主防災組織の皆さんがポンプ車を手伝い、バケツリレーをし、ある密集地では35本の消火器を使い小火で消していただいた例もあります。耐震性の100トン防火水槽が32基と、全ての学校のプールを満水にして頂くことを以前からお願いしていた事が大いに幸いしました。

消防職員の活動とともに消防団員が延べ939台、4,846名が活躍していただきました。また、シルバー防火クラブ、婦人防火クラブなどの自主防災組織の方々の活躍も目ざましいものがありました。

自衛隊については、伊丹の第３師団36普通科連隊が１月17日の21時には調査に、18日の朝７時には63名が立花町３丁目の11名の亡くなられた火災現場に入ってもらいその夕方には、尼崎市は行方不明者ゼロと、50万市民の安否の確認にこぎ着けたわけであります。また、救急活動は149件の出動があり、６台の救急車の他に予備車や各消防署長の指揮車、ポンプ車、トラック、乗用車も使いそれぞれの病院に搬送したが、通信網の混乱から救急救命士に対し医師の指示が得られず、それぞれの救急隊長に任せることにしました。この時、救急救命士が行える徐細動、ラリンゲルマスクによる気導確保、輸液、点滴等がドクターの指示により出来るのだが、どうしても指示が貰えないため、それらの特定行為ができず歯がゆい思いをさせました。将来弾力的に解釈して救命士の判断にまかせ処置できるよう救命士法を改正すべきです。

一方、市外応援につきましては、18日夕方には、神戸市に救助隊を応援させ、芦屋市、兵庫県へも連日のように応援出動しました。幸い防災センターには８万食の乾パンと5,000枚の毛布と100セットの医薬品を持っていたので、夕方には西宮市等に乾パンや医薬品を応援しました。また、消防団が芦屋市の人命救助、検索、消火等に225名の応援し、兵庫県庁などへ救援物資の仕分け等の応援に駆けつけました。

◎室崎教授 ――「備えあれば憂いなし」ということ。尼崎市の場合は地震対策編に震度６を想定したこと。防災センターの拠点を中央と北部の２か所に備蓄機能、情報処理機能の整備がされていたこと。医薬品を大量に備蓄していたこと。市民、消防団、消防職員、一般職員に大きな防災ネットワークを持っていたことが巧く行ったということがある面でラッキーだったのでないか。今度は六甲断層の端の五助橋断層とか有馬・高槻構造線は動いてないが、それらが動いたらどうなるか、和歌山の沖のほうで大きなマグニチュード８程の地震がきたらどうなるか、今回の地震の教訓をしっかり生かして次の段階を見据え教訓として学びながら次に備えることが大切です。救急救命士については平常時と非常時の考え方を変えねばと思います。非常時は緊急避難ですから基本は人命優先です。

大規模災害は予定外の筋書きのないドラマで、災害が起きたときどうするかという対応が出来ないと如何に良い防災計画が出来ていても意味がありません。

◎高田教授 ―― 今回の地震で条件が変わっていたらどんな事が起こったろうか、季節が夏場であれば、曜日が日曜日や土曜日であれば、時間が、更に、直下型でなく海洋型の地震であればと、尼崎市は神戸市とは揺れ方が随分違っていました。液状化にしても神戸は余裕もなく地盤が一瞬の内に数10センチ沈んだが尼崎市は水圧が徐々に上がり重いものは沈み軽いものは浮くといった状態でした。

教訓として、もし条件が変わったならということを想定しながら対策を作る必要があります。耐震技術が生かされた場面が多くありそれから学ばねばならないのです。生き残ったのは何故か検討する必要があります。

六甲アイランドは耐震継ぎ手を使用していたのでほとんど壊れていません。変電所について、昭和50

年以降に作られたものは全く壊れていない、耐震技術は生かされていたと言え、これらを教訓とし対策を建てなければならないです。

◎室崎教授 —— 危険物施設で条件が違うとか最悪の場合は？

◎今駒助教授 —— 神戸市に石油コンビナートがあるが、３割のタンクに不等沈下や変形が出ました。しかしその中の９割は旧法下で建設されたものでした。タンクが不等沈下し、さらには防油堤が役立たなくなったにもかかわらず油が流れ出さなかったのは、タンクと配管の間がフレキシブルパイプで接続されていたからです。この点は評価できます。

先にも少し触れたが、東灘区の六甲アイランド対岸にＬＰＧ（液化石油ガス）の２万kℓタンクが３基あります。その中の１基に地震直後ヒビが発見されました。ヒビは余震で広がり、１月19日には遂に半径２kmの範囲の住民に避難命令が出されました。なぜこのような広い範囲に避難命令が出されたのでしょうか。

ＬＰＧ（液化石油ガス）、ＬＮＧ（液化天然ガス）に代表される液化ガスタンクの特徴として、ヒビ割れだけでタンクが爆発し（蒸気爆発）、内部の液体が広範囲に飛び散り気化すると同時に、火の気がまったくない場合でも爆発の際に生じる静電気で発火、燃焼する可能性があることが挙げられます。実際にはこのような惨事は起きなかったが、最悪の場合を想定してみると、６万kℓの液化ガスで直径2.4km、高さ1.2kmの半球内が1900℃の炎で包まれることになります。

◎室崎教授 —— 防災ということも最悪を考えそれからイメージを作り対策を立てることが大切です。山本先生に構造物の耐震設計について聞きたいのですが？

◎山本教授 —— 最新の基準について、現在の品質に照らしてこれで大丈夫だろうかと考えておく必要があります。緊急を要するものは直さねばならないのです。そうでないものは、計画的に補修すれば随分被害が少なくて済むはずです。２階建は通し柱が必要であり、壁構造は筋交い、間柱をいれる、ハードボードを張る。屋根は軽量にする。ブロック塀は止め植樹する。形はシンプルに、改造時は境目をしっかりとする、家財は壁に組み込む等の壁構造とするのが良いのです。土地を購入するときは活断層や盛土の状態を良く調べ手抜きをしない建築施工をします。維持管理は日頃の心掛けが大切です。

◎室崎教授 —— 火災を防ぐには、予防対策は？

◎大垣教授 —— 神戸市で通電火災と報道されたがこれらは未送電地区でした。175件中43件が電気に関した火災であるがそのほとんどがボヤでした。また、そのほとんどがマンションで外観を見ると大丈夫と見られ送電したと言っています。この事は今後十分注意しなければならないのです。対策として地震感知ブレーカの設置が有効です。

◎堂本消防局長 —— ストーブは必ず耐震性のものにする。ガス漏れがなくてもローソクや裸火は絶対に使わない。やはり普段の反復訓練が本当に役立ちました。消防や自衛隊も交通規制が即刻出来るように災害対策基本法を改正すべきであるし、機械警備が多くなっているが防火対象物にも人による警備がやはり大切であることが実証されたと思います。

◎室崎教授 —— 先ず人間が災害に強くならねばいけません。防災の正しい知識を持ち、最近の技術の有効性と限界を一人ひとりが知り、教育、訓練を職場、地域で行うということです。多くの犠牲を出すという凄く高い授業料を払ったのだから阪神･淡路大震災の教訓として今後進めてほしいです。

地震復興

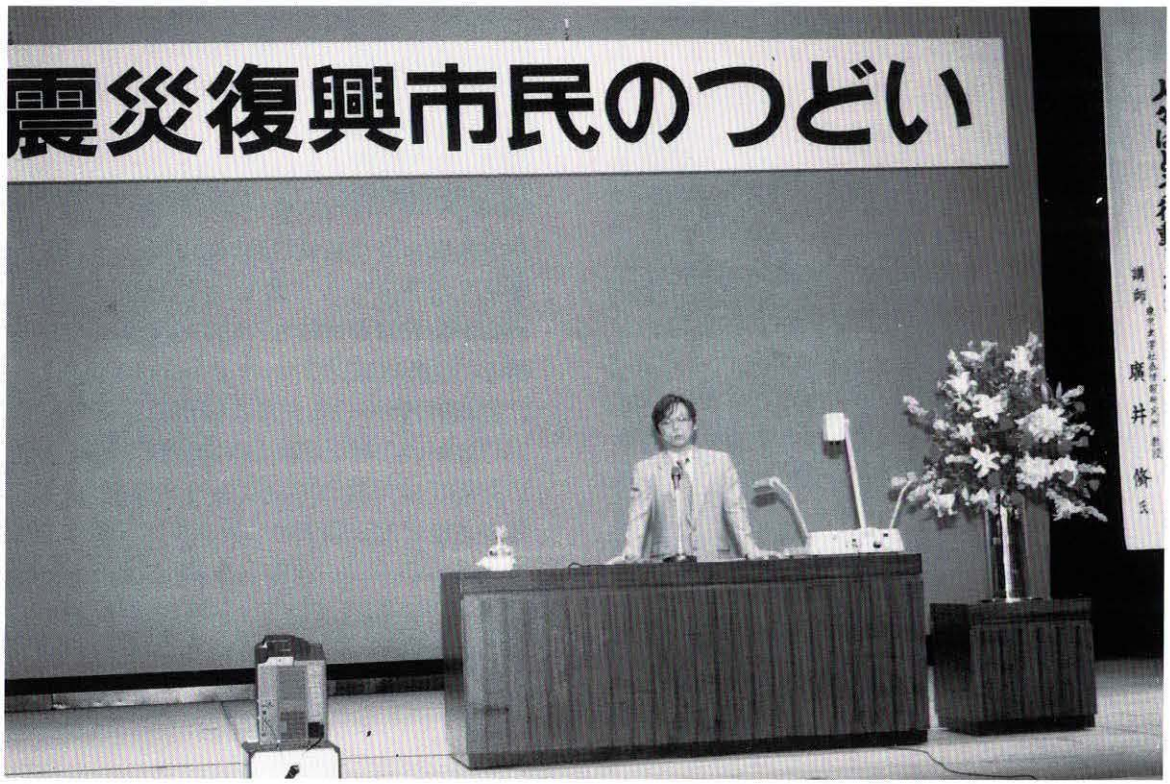
市民のつどい

と　き　平成７年８月７日(月)
13：30～16：30

ところ　アルカイックホールオクト
及びその周辺

主　催　震災復興市民のつどい実行委員会
尼崎市防火協会

共　催　尼崎市消防局
尼崎市消防団
(財)尼崎市防火普及協会



第一部

基調講演

「阪神・淡路大震災　人々はどう行動したか、どうすればよいか」

講　演　者

東京大学
社会情報研究所教授

廣　井　脩（ひろい　おさむ）

【経　　歴】 昭和21年　群馬県に生まれる
昭和44年　東京大学文学部心理学科卒業
昭和50年　東京大学社会学系大学院博士課程修了
昭和50年　東京大学新聞研究所助手
昭和55年　東京大学新聞研究所助教授
平成４年　東京大学社会情報研究所教授

【専門分野】 社会心理学・災害社会学

【主な著書】 「地震予知と社会的反応」「災害と人間行動」
「災害と日本人」「災害報道と社会的心理」
「うわさと誤報の社会心理」その他

平成７年１月17日　午前５時46分、突然兵庫県南部地震が発生し、この地震により死者約６千人、負傷者約３万６千人という関東大震災以来の大災害です。

この大災害に遭われた皆様に心からお見舞い申し上げます。

1　地震当日の私

私は、地震の当日、大阪・天王寺の９階建ホテルの９階にいました。午前５時46分という時間はふだんはまだ目が覚めていないが、たまたま大学院生の原稿を読む仕事があって原稿を読んでたところでした。従って、目が覚めている状態で地震を体験したことになります。

東京で感じる地震は大部分が海溝性、要するに震源が遠い海底であり「カタカタ」と縦波（Ｐ波）になります。これは初期微動という揺れが来て「あっ、地震だ！」と感じて、しばらくすると大きい揺れの場合「グラグラ」とくるが、今回の地震は皆さんも体験されたように「ドーン！」と、まず下から突き上げるような大変な揺れでした。

しかし、私の泊っていたホテルでは、テレビも額縁など落ちることなく被害はゼロでした。災害直後からテレビのスィッチを入れました。

マスコミ報道は最初、悠長な感じであったが午前８時ごろから阪神高速道路の横倒しの状況、神戸市内の火災状況等、ショッキングな映像が飛び込んできました。

私は、午前９時30分ごろから災害現場に向かったが、大変な交通渋滞で阪神青木駅に辿りついたのは午後６時30分でした。

2　災害現場をみて

地震発生から３日後に気象庁始まって以来の震度７という記録が出たが、淡路島から神戸を縦断するベルト地帯は、長さ20キロメートル、幅１キロメートルにわたって震度７に見舞われたことになります。現場は、激震地に近づくにつれて被害がひどくなってきていました。

雲仙普賢岳噴火の際にも行き、また、一昨年の北海道南西沖地震にも３日後に奥尻島青苗地区を視察したが、ここも非常にひどい状態であり、壊滅的でした。

このように雲仙や奥尻島は、災害のこわさをまざまざと教えてくれるくらいに壊滅状態でしたが、今回の地震は行けども行けども被災地という意味で災害のひどさと、被害の大きさに愕然としたというのが当時の印象でした。

それから十数回、今回の地震の被災地を視察して現在も調査を続行中です。

3　開発と災害

今回の地震の被害を考えると、おそらく津波を除いて都市災害で心配された被害のほとんどが出てしまったと言っても過言ではないと思っています。

たとえば、神戸のポートアイランドは大きな液状化が起こり、一時は地面がグシャグシャになってしまったが、「開発と災害」という問題を考えさせられるようなことが起った。

これまでは、この地震が起こるまでは絶対に壊れないと信じられていた新幹線の橋脚、高速道路等、現代の日本の土木技術が誇る施設が約20秒間の大きな揺れと10秒足らずの主要な揺れによってあっけなく崩壊してしまいました。

また、西宮の仁川では地震と同時に大規模な土砂災害の発生により避難する間がなく33人の方々が一瞬に亡くなられたが、地震に伴う土砂災害の怖さも改めて見せ付けられました。

4　住民の生々しい体験インタビュー

今回の地震で約6千人の死者が出たが、大きな人的被害を生んだ最も一番の要因は、何といっても20万棟を超える建物の全半壊と思っています。多数の木造家屋の倒壊により下敷きになって死者の約9割が圧死ということが言われています。

千人の死者が出た東灘区本山地区に何度も視察して、住民に地震時の体験を語ってもらいました。

＊　木造2階建てアパート1階の住民（女性）「地震ということがすぐにわかった。隣に寝ていた夫の腕を引っ張って〝お父さんこっち〟とテーブルの下にゴロゴロところがり込んだ途端、天井が落ちてきました。」

この女性は打ち身だけですんだが、夜が明けてきてから「助けて～助けて～」と叫んでいたところへ近所の人に助けられたといいます。そして、この女性の話では、地震と感じてから天井が落ちてくるまで「イチ　ニイ　サン」というくらいの間隔であったとのことです。前述の通り大きな揺れによってかなり早い時期に崩壊したことがわかります。

5　木造家屋と地震

今回の地震が起こるまでは、従来、地震によって木造家屋が倒壊するということは、防災研究者間ではそんなに言われていませんでした。現代は先進国として生活水準も随分向上しており、住居もそれなりに立派になっているはずです。しかも、木造家屋はもともと柔軟性があって地震に強いということであったが、これほど多くの木造家屋が地震によって倒壊することはほとんど想定されていませんでした。

私の知る限りでは、静岡県が次のようなことをおこなっています。それは、「お宅の家が地震によって潰れるかもしれないです。だから自分の家を耐震診断したり、危険と思いましたら補強をして下さいよ。」というキャンペーンを展開しています。当県は、東海地震の危険性があり、地震対策としての想定は、マグニチュード8クラス、震度7であることから家屋の補強が必要となってきます。人的被害を防ぐためには、家屋の構造を丈夫にすることや家屋の耐震診断、補強を今後はもっと進めていくことがまず第一です。

6　家庭内防災対策

更にもう一つ重要なこととして家庭内防災対策を忘れてはならないです。早朝であり、多くの人は家庭にいたところへ地震が起こったわけだが、3万6千人の圧倒的多数は家庭内でケガをしています。一部損壊や半壊家屋によるケガではなく、家具等の倒壊によるものが多かったのです。

芦屋でのアンケート結果から分析すると、8割8分の家庭で食器棚が倒れたという回答がありましたが、これは家は倒壊しなくてもほとんどの家庭で家具類の倒壊があったことが言えます。

都市部での場合は、生活空間が広くないところへ大型化した家具類が凶器となり、特に直下型で下から突き上げることによってあらゆる方向に倒れます。地震当日のＮＨＫ神戸放送局の内部の映像は外国のテレビにも流れているが、まさにこの映像が象徴しています。

ほとんどの家庭で家具の固定がなされていませんでした。昭和53年の宮城県地震では、負傷者が9千3百人であるが、その内訳として家具の倒壊や棚の上の重い物の落下によるケガです。

今回の地震後、デパートの防災用品売り場は品物を買い求める人で一杯であったが、このような避難

袋などの防災用品を準備しただけでは十分とは言えません。

従って、地震による被害を減らすという家庭内での防災対策としては、防災用品の準備に加えて・家具の固定　・落下危険物の整理　・家屋の補強　・ブロック塀の補強　・自動販売機の固定などが基本となってきます。

7　情報について

今回の地震では、情報が非常に乱れていたが、早い段階で情報収集ができていれば、被害は少なかったのではないでしょうか。

電話が被害を受けたことが今回の地震の特徴であります。無線による通信としては警察、消防、防災行政無線等で必要最小限の情報連絡はできるが、たとえば病院と消防、病院と病院間の連絡がとれませんということが出てきます。

従って、災害時には組織内の有線に頼らない情報連絡方法を考えることが課題です。

今回の地震は、被災地に向けて親類、知人などから安否の確認のために電話を利用しても不通状態となったが、逆に被災地から外に向けて情報を流すと通じやすくなります。たとえば、家族が離れ離れの時の災害対応はどうすればよいですか。これは、誰か遠い所に中継点を事前に家族同士で話し合っておいて、お互いの連絡網を設けておくと情報は伝わりやすくなります。

テレホンカードも停電時には使えないことは、今回の地震で皆さん経験されたことと思うが、停電地域で公衆電話を使おうとしても通じなかったはずです。

なぜなら、カードの読み取り装置は電力会社の電力で動いていることになるから停電時には使えないということになります。

そこで防災対策のノウハウとして覚えておいてほしいことは、子供達が学校や塾に通っている時に緊急連絡用としてテレホンカードを持たせているケースがあると思うが、前述のようにカードではなく10円硬貨を持たせてほしいのです。

8　夜間と昼間の被害の差

今回の地震は明け方に起こったが、もし、昼だとしたらどうなるかを考慮した防災対策を考えておく必要があります。

文部省では、防災教育についてどうするかという委員会を作っており、私もその一員だが、今は神戸を中心にして30万人のかたがたが1,000カ所を超える避難所に避難され、相当長期間の避難所生活をし、現在もなお避難所生活を余儀なくされている人が多数おられる状態です。

今回の地震では、約6割が学校に避難し、学校の教職員の献身的努力で避難所としての運営ができたが、もし、昼間だとしたらどうでしたか。

児童達は授業を受けている時に地震が起こったらどうでしたか。

幸いにも学校が潰れたという被害はほとんどなかったものの、昼間の地震を考えた場合、児童達への被害を考慮して想像力を働かせた今後の防災対策に活かす必要があります。

また、重要なこととして、これは尼崎でもあったと思いますがブロック塀や自動販売機がほとんど倒壊していたことです。

今回は時間帯が夜明け方ということでこれらによる犠牲者が出なかったが、昼間であれば相当大きな人的被害があったのではないでしょうか。

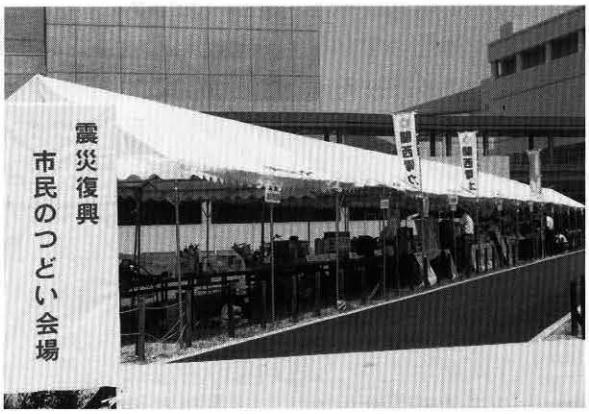
前述の宮城県地震で9人がブロック塀の倒壊による犠牲者で、全員が老人と子供でした。

なぜかと言うと、地震発生が6月12日の非常に天気のよい日で午後5時17分であり、老人が子供を連れて散歩している途中に地震が発生しました。災害時の人間の心理として「グラグラ」と揺れて立てなくなると何かにすがりつきたいという気持ちに誰でもなります。

ブロック塀がまさか倒れるとは思わないから寄って行ってしまうという人間の心理の非常に危ないところであり、頼りにしていたものが凶器になるということです。

今回は問題にならなかったが、ブロック塀や自動販売機の危険性についても防災知識として皆さんには再認識していただくとともに、特に子供達にはこのことを十分に指導していただくことをお願いしておきます。

震災復興市民のつどい
「阪神・淡路大震災
人々はどう行動したか、どうすればよいか」


震災復興
市民のつどい会場

震災復興市民のつどい

第二部

特別講演

「阪神・淡路大震災とわたし」

講師　落語家　桂　文珍

阪神・淡路大震災で亡くなられた方々に心からお見舞い申し上げます。

地震当日は、猫が起こしにきてくれたため、家族が助かったですわ。「ドーン！」と突き上げられたかと思うと、立っておられず思わずホームコタツにもぐり込んでいましたなあ。そして、揺れがおさまって表に出たんですが、ふと足元を見ると、靴下を履いてまんねん。これ、履いて寝ていたんでガラスの破片の上を歩いてもどうもなかったんですわ。家族の安否の確認をしたあと、近くの高台に登り、近所の人とお互いの無事を喜び励まし合いました。その時、手に持っていた物といえば、なんでかクリスマスツリーでしたわ。わが家は傾き、電線がのれんのようにぶら下がり、辺りはひどい光景でした。現在わが家は解体中で８月中に着工の予定ですわ。

この地震で思ったことは、絆〔きずな〕が大切だということでんなあ。近所の人とは今まであまり話をしませなんだが、たくさん友達になりましたし、近所付き合いの大切さを知りました。こういう事が有りお互い炊き出しなどをしたんですわ。戦中の人は強いと思いましたなあ。水団〔すいとん〕の作り方を教えてもらったり、窓ガラスに紙を張れば安全だということを教えてもらいました。

交通機関が使えなかったので、国道２号線を原動機付きバイクで大阪まで通いました。その内、阪神電車が梅田駅から御影駅まで開通したためこれを利用して出勤して通いましたがな。

今年の梅雨で、ものすごい雨が降りましたが、わが家の住んでいる辺りは危険ということで避難勧告が出されたので、家族で難波のＮＧＫに避難しましてん。

これはまさしく２次災害と言うものですが、地震には火事など２次災害が必ずあらわれます。

「ゆとり」

「ゆとり」とは、一つは金、皆さんにはゼニの方が分かりやすいでんな。それと時間や家のスペース等があると思いますわ。人間生活には空間が必要です。東京、大阪間は科学の進歩によって時間短縮されたが、逆に、人間が生み出した科学進歩のため、逆に忙しくなったといえますな。

「考え方について」

お年寄りには知恵がありますなあ。柔らかな物の考え方が非常に大事やと思います。例えば、ケーキがあって８等分したいけど、３回しか切ってはいけないとしたらどうしたらよいか、出来ますか？　柔らかな頭で考えてください。気持ちの上で「慣性」というか人の気持ちのほうに流れていく傾向があるが、柔らかであれば色々な考えが出来ます。では、更に、ケーキの上に苺が載っていたら８等分はどうしてしますか？　ゆとりがあると、アイデアが生まれるのでないかと思います。

「創造性について」

防災も準備が大切でんな。心のゆとりを持って生きていると立ち上がりが早いと思いますわ。明るく面白い人は助かりまんなあ。明るい気持ちを持って、あらゆる困難に負けない、逞しい心をもって生きなあきまへんな。

せやけど、私はヤッパリ、絆〔きずな〕でんな。

ええ友達から、励ましを受けて、どうにか厳しい冬も、梅雨も、灼熱の太陽の照りつける夏も、乗り越えてやっていけそうな自信がわいてまいりましたな。生きていれば色々なことが有りますわいな。

どうぞ、皆さんも、体に十分気をつけてもらって、逞しく頑張ってもらわんとアカンと思います。私も色々な所でしゃべらしてもらいますが、お互い頑張ってこのたびの大震災を乗り越え、元気を出して生きましょうと、励まし合って生きたいと思ってます。

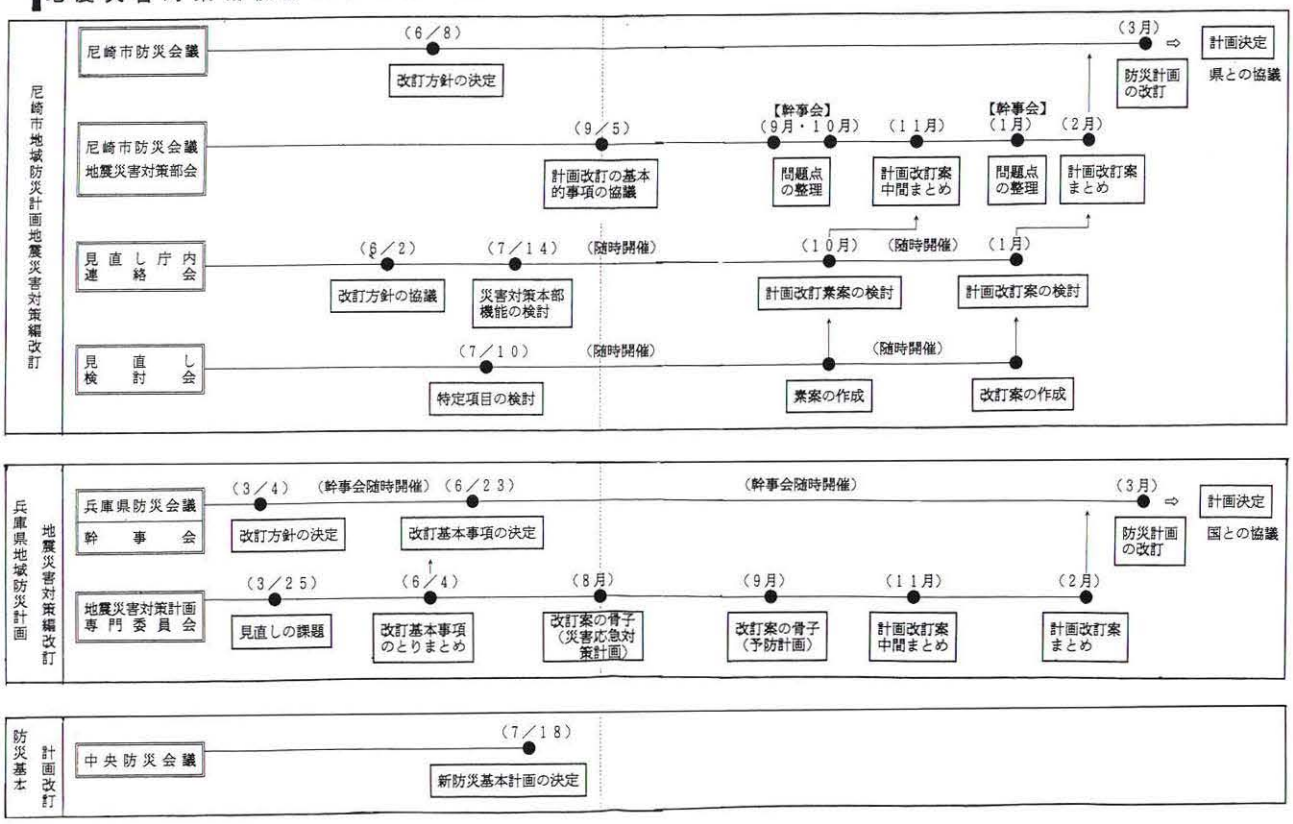
復興の息吹

1　尼崎市地域防災計画〔地震災害対策編〕の改訂

1月17日に発生した、兵庫県南部地震の発生により、本市では推定震度6の烈震に見舞われ、想像をはるかに超える被害を受け、災害活動機能も大きく制約を受け、マニュアルにない事態の発生が数々の問題点を残した。今回の改訂にあたってはこれらの教訓を十分に生かし、人命の安全を最優先とした災害に強いまちづくり、人にやさしいまちづくりの一端を担い、さらには、災害に対する備えや災害発生時の対応をより実戦的なものとするよう検討を進めている。

改訂の基本姿勢として、(1)　震災経験を生かす。(2)　実行性の検討を行う。(3)　災害弱者への配慮を行う。等を盛り込む。

尼崎市地域防災計画
地震災害対策編検討スケジュール



防潮堤（初島地区）にできた段差を調査する
神戸大学高田至郎教授

2　緊急広域応援隊の発足

阪神・淡路大震災の教訓を踏まえ、国内で発生した大規模災害時における人命救助活動等をより効果的かつ充実したものとするため、全国の消防機関相互による迅速な援助体制をとる緊急消防援助隊が発足した。当市は、この援助活動を行う緊急消防援助隊に、救助部隊、救急部隊、消防部隊に各１隊、計３隊を登録し、平成７年６月30日（水）東京都千代田区の全国都市会館大ホールにおいて、自治大臣、消防長長官等出席のもと発足式がおなわれた。11月25日には、滋賀県彦根市において、第１回近畿広域防災訓練が実施され当市からは消防部隊が参加する。また、28、29日は東京において全国的な訓練を実施されるがこれには救助部隊が参加することになっている。

3　高規格救急自動車の寄贈を受ける

阪神・淡路大震災時には６台の救急隊の他に予備の救急車や指揮車を総動員して救急活動を実施したが、さる８月９日に市長も出席され贈呈式が行われた。以前にも防災センターに防災ビデオ装置を贈られた市内梶ケ島在住の澤水寿子様から「一人でも多くの救命を」と高度な救命装置を備えた高規格救急自動車（3200万円）を市民のためと寄贈された。

消防本部の各種情報の掲出状況

防災センター４階に積まれた救援物資（毛布）

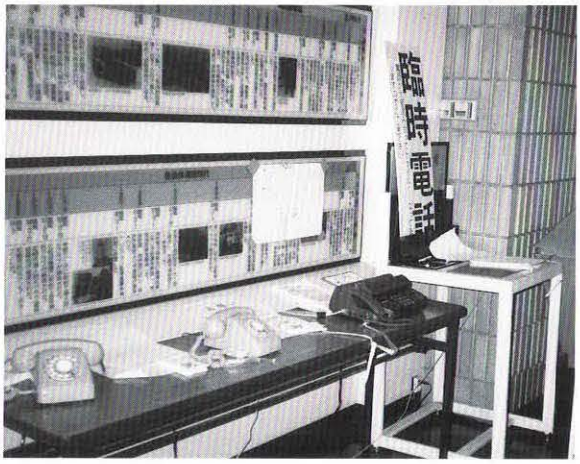
4　防災指導車の寄贈を受ける

財団法人日本宝くじ協会から防災指導車「けすゾウくん」の寄贈を受ける。

ボディに可愛いぞうさんのイラストが入った防災指導車で、消火や通報の訓練のほか、ＶＴＲやビデオカメラ等参加者が「見て触れて体験できる」という力強い助っ人である。

5　100ｔ防火水槽の設置

過去尼崎市においては年次計画で100ｔ防火水槽を設置してきたが、今年度は２基を設置する。これで尼崎市には100ｔ防火水槽は18基、飲料水兼用が２基の計20基となる。



防災センター１階ホールにＮＴＴが臨時電話、ファクスを設置

防災センター１階展示ホールにＮＨＫがテレビを設置

6　悲しみを乗り越えて再生を決意

－尼崎市犠牲者合同慰霊祭－

震災の日からおよそ50日が過ぎた3月5日、尼崎リサーチ・インキュベーションセンターで「兵庫県南部地震尼崎市犠牲者合同慰霊祭」が厳かに行われました。慰霊祭は午前10時から犠牲者への冥福を祈る1分間の黙とうに始まり、尼崎市消防音楽隊が追悼曲を演奏しました。市内で亡くなられた27人と市外で亡くなられた市民10人に、市長をはじめ市議会議長、内閣総理大臣代理厚生大臣、県知事ら、そして遺族を代表して古田順規さんが追悼の意を述べられました。また、皇太子ご夫妻が献花をされました。遺族の皆さん96人は菊の花で飾られた祭壇に向かい悲しみをこらえて白菊をささげられました。その後、会場を訪れた約600人が犠牲者の霊を慰められました。

宮田市長は式辞で、「犠牲者となられた方々のごめい福をお祈り申し上げますとともにご遺族の皆様に対し、心からお悔やみ申し上げます。今、ご霊前にたたずみ、改めて犠牲となられた方々の無念を思いますとき、私たちは多くの英知を結集し、この空前絶後の震災を乗り越え、明日に向かって災害に強く、人にやさしいまち、そしてにぎわいと活力にあふれた新しい世代に確実に引き継ぐことを固くお誓い申し上げます。」と犠牲者のめい福を祈り、まちの復興の宣言をしました。

防災週間パネル展示

非常召集訓練

自衛消防熟練者講習会

・・・・・・・ 安全なあしたをめざして ・・・・・・・

１月17日未明、兵庫県南部を突如襲った大震災は一瞬にして多くの人命を奪うとともに阪神・淡路地域の都市機能を麻痺させる未曾有の大災害でした。

その悪夢から早くも10カ月が過ぎ、いまなお余震の恐怖と戦いながら、不自由な避難生活を余儀なくされている多くの市民が居られる中ではありますが、ようやく落ち着きを取り戻し始めています。

安心して暮らせるまちづくりのために、尼崎市震災復興基本計画を定め、復興に向けて、被災したまちの復興と、災害に強いまちづくりをして、人に優しい水と緑のさわやかなまちにしようと、行政、市民、事業者が一体となって取り組んでいます。

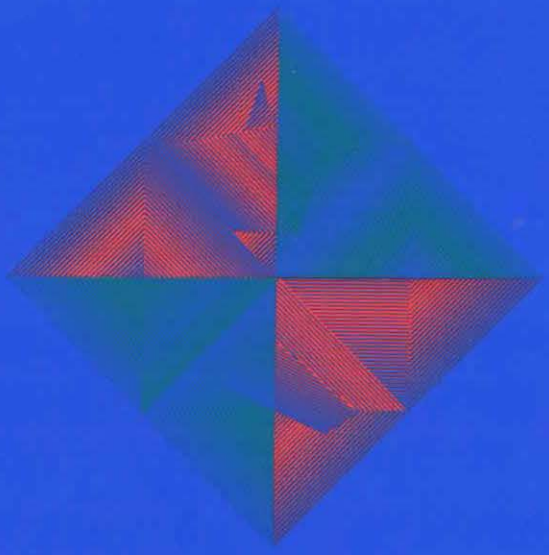
被災の状況を中心として、記念誌を発行することになりましたが、いざ記録になる写真をとなったとき、被害の大きさに比較してその記録写真の少ないこと、しかし、あの災害の最中、必死で消火、救助、救急活動している中での取材撮影をすることがいかに困難であったことか、活動と取材広報の難しさを痛感させられるところであります。

この大震災で、多くの人が苦痛と悲しみのなかで体験したことを「教訓」として将来に役立てなければならないと考えます。私たち消防職団員はそのために、市民と一体となり「教訓」を生かし安全で住みよいまちづくりに邁進していかなければならないと思っています。

阪神・淡路大震災
尼崎１１９の活動記録
平成７年12月20日 発行

発行　尼崎市消防局
　　尼崎市消防団
　　〒660 尼崎市昭和通２丁目６―75
　　電話（06）481−0119

印刷　ファースト印刷



尼崎市消防局・尼崎市消防団